
哭雨 —綴命記第3章—

ろく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哭雨 ― 綴命記第3章―

【Nコード】

N3497V

【作者名】

ろく

【あらすじ】

豊作祈願祭を控えた里には、慌しくも賑やかな空気が漂っていた。同時に、不穏な気配も近づきつつある。
綴命記第3章。

1 夜陰

—

黄昏時に降り出した雨は、夜半を過ぎて霧雨に変わった。暗い森を静やかに濡らしては、時折風に舞いサアと音を立てる。

紫呉は頬を濡らす雨を制服の肩口で拭った。しかし身を包む壱班の制服も雨に濡れており、結局のところ頬の水滴は拭えず仕舞いである。それに少しばかりの苛立ちを感じつつ、眼前の木屋を眺めた。灯りは無い。しかし、確かな人の気配を感じる。

紫呉は腰帯に差した警棒に手を伸ばしかけて、やめた。懐から取り出した小刀を抜き、鞘を腰帯に差す。

木屋の戸に耳をつけ、中の様子を窺う。男の声と、女の声。低くぼそぼそと語る声が聞こえてきた。

一つ、息を吐く。唇を濡らす雨粒を舐め取り、戸を蹴り破った。

「な、何だ!？」

身じろぐ人影に、素早く身を寄せた。

「動くな」

男の首に刃を突きつける。男が唾液を飲み下す音がした。

積み上げられた材木に紛れるようにして、もう一人のはこちらを窺っている。女だ。暗がりの中、女の目だけが光って見えた。

「に、逃げる」

男は掠れ声で言った。女の視線が揺れる。こちらとは逆方向、材木の奥を見やった。あちらにも戸口が有るのだ。

「動くな」

もう一度告げれば、奥へと足を向けかけていた女はぴたりと動きを止めた。

「他の仲間はどこです?」

僅かに刃を皮膚に食い込ませると、男がぐうと呻いた。恐怖の為

に荒くなつた息の合間、男は言葉を紡いだ。

「い、言うものか」

「さつさと吐いた方が身の為ですよ」

女は、男と紫呉を順に見やった。

「お前も言うな、言うなよ。逃げる」

男は荒い呼吸に肩を上下させている。女はこちらをじつと見ている。

そして、踵を返した。

紫呉は男の腿に小刀を突き立てた。男の悲鳴がこだまする。

紫呉は女を追った。木屋はそう広くない。すぐに追いついた。襟を掴んで引き倒す。仰向けに転がし、腹の上に乗り上げた。

「僕は動くなと言った」

投げ出された女の掌を右の足で踏んで床に縫いとめ、喉には弓手の五指を食い込ませる。

男が倒れる音がした。呻く声が聞こえる。

女は目を見開き、紫呉を見上げている。紫呉の髪から滴り落ちた水滴が、女の顔を濡らした。

「吐け。仲間はどこだ」

紫呉は懷からもう一つ小刀を取り出す。鞘を啜えて刃を抜き、女の首に突きつけた。

「い、言う、な」

叫びに枯れた声で、なおも男は女を止める。

女はひいひいと細く荒い息を漏らしている。紫呉は女の首を拘束していた手を離し、啜っていた鞘を取った。腰帯に鞘を差す。

濡れた髪が頬に張り付いて煩わしい。そういえば制帽をどこに落としてきたのか。気がつけば無かった。

「……こ、殺すなら殺しなさい」

震える声で女が言った。紫呉は鼻で嗤い飛ばす。

「虚勢を張らずとも結構。素直に助けてくれと言ったらどうです？ 命乞いの作法はご存知でしょうに」

女は齒の根が合わぬようだ。かちかちと齒が鳴っている。

女の頬を雫が滑り落ちる。雨粒なのか涙なのかは分からなかった。ふと、静けさに気がついた。男の呻き声が聞こえない。

女もそれに気がついたようだ。男の方を向こうとするが、喉元の刃に邪魔をされ首を動かせない。必死に眼球を動かすも無意味と悟り、紫呉に目を据えた。

「人殺し……っ」

紫呉はちらりと男を見る。どうやら気を失っているだけの様だ。だが、女の言う事は確かにその通りなので黙っていた。

それに、死んでいると思いついて入っているならば好都合だ。自棄になって仲間の居所を吐くかもしれない。

女は、食い縛った齒の間から搾り出すようにして息をしている。大きく睜った目で紫呉を見た。

「何も言うものですか。……こ、殺しなさいよ。怖くないわよ」

女の吐く息は震えている。相変わらず齒はかちかちと音を立てていた。

「……そうですか」

紫呉は溜息混じりに言った。小刀を女の喉元から除けると同時、女の体から力が抜けた。安堵に瞳は緩み、ほっと息を吐く。

だがすぐに女はまた体を強張らせた。紫呉が刃を振りかぶったからだ。

「ひ」

女の耳のすぐ真横に振り下ろした。床に突き立てられた刃は、ピンと音を立てながら揺れている。

固く閉じた目をゆるりと開け、女は横目でそれを見た。途端に呼吸は更に浅くなり、胸は忙しく上下する。

「……僕は、お前のような輩が嫌いだ」

女の上から降りて、紫呉は蹴破った戸とは逆方向の戸口へ向かった。

戸の外に控えていた影虎に顎をしゃくって中を示し、拘束するよ

う目顔で伝える。影虎は片手を挙げ、返事に代えた。

中に足を運ぶ影虎を見送り、紫呉は木屋の壁に背を預けた。

妙に煙草が恋しくなり、懷に手をやる。しかし残念な事に制服だ。
煙草は無い。

せめて口寂しさを紛らわせようと、夜空を仰いで口を開ける。舌
を伸ばし霧雨を受けるが、不味いばかりで余計に虚しくなった。

2 朝露

先だつて里を騒がせた破天党、里炎組の組頭・源修一とその弟・源悠一の処刑が報じられたのは、萌月の終わりの事だった。

その報に煽られたのか、破天の連中がこしばらく活気づいている。里炎と少なからず関係のあつた組なのだろうか、彼らは濔月の初め、憤りに任せ乾吉班の屯所に特攻をかけた。それが昨日の事である。

大半の者はその場で捕らえたが、数名を取り零した。丁度吉班に詰めていた紫呉と影虎と、吉班員の数名で彼らを追った。

木屋に逃げ込んだ男女二人は捕らえたものの、残りの何人かは夜陰に紛れ見つからず仕舞いだ。捕らえた二人はまだ口を割らない。

紫呉は乾吉班の屯所で朝を迎えた。仮眠用の寝台の上、身を起こして眠い目をぐしくし擦る。

うんと伸びをして、大きな欠伸を漏らした。滲んだ涙を拭い、枕元の袴に手を伸ばした。

まだ眠い頭でもそもそと支度をする。黒の単の上に白の袴を着け身形を整えると、多少はしゃんとした気分になった。

手ぬぐいと歯^{ハブラシ}刷子を持つて井戸に向かう。雨はいつの間にか止んでいた。草木に溜まつた水滴が、朝の眩い陽光にきらりと光る。

井戸には先客がいた。莉功だ。眠たげな顔をして歯を磨いている。

「……おはようございます」

「……んー」

お互いに半分閉じた目で挨拶をする。

井戸には木板が被せられ、その上には最新式の唧筒^{ポンプ}が取り付けられている。紫呉は欠伸しつつ、唧筒の取っ手を押した。

噴き出す水を手で受け、顔を洗う。冷たい水が心地良い。手ぬぐいで顔を拭き、軽く口を濯ぐ。濡らした歯^{ハブラシ}刷子を咥えた。

莉功が歯刷牙子を啞えたまま、もごもご何かを言った。彼の身振りから、そのまま水を出しておいてくれと言いたいのだろうと察しをつける。

莉功は口を濯ぐなり「眠い」と呟き大きな欠伸をした。銀鼠色の髪は乱れに乱れ、髭は不精に伸びている。制服も汚れや皺が目立つ。実にくたびれた様子だ。いつもかけている眼鏡はかけていない。

「眼鏡はどうしたんですか？」

「ああ、昨日の特攻のおかげでさあ、ひび入っちゃって。おかげでちょー見え辛い」

唧筒に手をかけ、莉功は細めた目で紫呉を見る。

「見えてるんですか？」

「何とか。ちょーぼんやり視界だけど」

「普段眼鏡をかけてる方が眼鏡を取ると、顔の部品が足りない感じですよね」

「部品で」

莉功は苦笑した。会話はとりあえずやめにして、紫呉は歯磨きに専念する事にする。

ずいぶん目も覚めてきた。歯を磨きながら腕だの腰だのを動かして、ついでに身体の方も覚まさせる。

「そいや影虎くんは？ あ、や、ごめんちん。後で良いよ」

もごりと不鮮明な説明をしようとした紫呉を止め、莉功は唧筒を押した。もごもごと礼を述べ、噴き出る水を手で受けて口を濯ぐ。

「影虎は僕ら駐在の弐班員以外の者に、今回の件を知らせに行っています。おそらくもうこちらに班員は来ているかと。あと、元気がありやついでに逃げた奴ら探しに行くわー、と言っておりましたが」

「似てね」

「うるさいですよ」

無然と言い返し、紫呉は手ぬぐいで口元を拭った。

「何っーか、しばらくは面倒くせえ事になりそうだな。時期が時期だし」

「そうですね」

毎年濡月初めの田植えの時期に、里は祭りを行う。土着の倉稲魂つかのみたまのかみ神である稲荷に、如月の血筋の者が舞を奉納し豊作を祈願する祭りだ。

祭りを間近に控えたこの時期は、里はただでさえ浮き足立っている。良くも悪くもだ。

「何もこの時期に処刑しなくてもよくね？　って俺は思っただけだねえ」

「見せしめではないのですか？　もしくは示威の為か」

「逆らうとこうですよー。お前らの動向気にして祭りやめたりしませんよー、処刑時期も気にしませんよーってか？」

「だと僕は思いましたが」

「あーあ、偉い人ってなあ怖え怖え」

莉功は腕を撫で摩り、ぶるつと震えるふりをした。

「そうだ。お前さん祭りにや如月側で参加したりとかはねえの？」

「兄様からは特に何も仰せ付かっておりませんが……。おそらくは前年と同じく警備に当たると思いますよ」

「ふーん。今回は警備しんどそうだなあ」

「ええ。破天の方々が、盛大に騒いでくれそうですね」

「それをぶっ潰してこそその示威行為ってわけかね。つか『示威』って響きがやらしいわー」

莉功はもしもじと身をくねらせる。

「思春期ですか」

「いやいや、俺の言いたい事すぐに分かっちゃうお前さんも十分思春期だべ？」

「いやらしいという事はつまり、手淫の意味での自慰と判断したままです」

「確かにじいさんの爺だの、二番目で次位だのはやらしくないわな」

「まあ実際僕は思春期ですけどね」

「やだもつこの子ってばー。朝っぱらから下ネタとか元気ねえ」

「今のつて下ネタに入るんですか？」

「んー？ んー……。まあ、さておきだ。一旦帰んのか？」

さておき、と何かをどかせる仕草をして、莉功は紫呉の格好を眺めて言った。

「はい。少し調べたい事が有りますから」

「こないだの事か？」

「ご名答」

結局、あの男——影虎に聞いたところ瀬川拓也という名らしい——の遺骸は見つからなかった。付近を捜しても見当たらず、紫呉の虚言ではないのかと勘ぐられた。証明する手立ても無く、事件として取り扱われてすらいない。

だが拓也に襲われた事も事実で、拓也が誰かに殺された事も事実だ。それを知っているのは紫呉と、楓と——やはり影虎に聞いた——、殺した本人が。

しかし何故、楓は壱班を頼らないのか。恋人を——これも影虎に聞いた——殺されたと訴え出るのが、順当であるように思えるのだが。

しかし、そんな訴えは未だに無い。そして、楓の消息も掴めない。「別に、莉功殿を始め壱班の皆様は、僕が虚言癖の持ち主であると疑われるのは良いんですよ」

「拗ねんなよー」

「拗ねてません」

少し皮肉っただけだ。

「……不可解でならないんです。何故僕は襲われたのか、何故あの男は殺されたのか、誰が殺したのか、目撃者は何故訴えないのか。僕はそれらが気にかかって仕方がない」

先日、楓の生家を調べ出して訪ねてみた。しかし楓はいなかった。両親は「娘は出かけています」と言っていた。何かを隠している様子は見受けられなかった。

悲壮な様相もしていなかった。娘婿が殺された事を知らないのだ

ろうと思える。

それに『娘は出かけている』と両親は言った。つまり、失踪だの失跡だのとは思っていないという事だ。

「……おかしな事ばかりだ」

どうにも腑に落ちない。紫呉は大きく息すると共に髪を掻き乱した。

「お前さんが嘔吐しているとは思ってねえんだけどさ、証拠が無いとどうにもなあ……。俺も自由にや動けんし壺班も動かせんし」

「ですよね……。いっそ、傷の一つや二つ貰っておけば証拠になり得たんですが」

ありがたい事に無傷である。

両親が楓の不在を壺班に届けているのならば、また話は変わってくるのだ。別件から今回の事件を浮かび上がらせる事も出来るだろう。

しかし両親は、娘の不在に事件性を感じていない。

「八方塞がりですね」

紫呉は溜息混じりに言った。

どこかで鶏が鳴いている。その呑気な鳴き声に、苛立ちと和みを同時に掻き立てられた。

3 遠雷

先程まで晴れていた空に、暗雲が群がりつつある。また一雨来るのだろう。

釈然としない気持ちを抱えたまま、紫呉は帰途についた。朝市に向かう人々の間を縫いながら歩く。

人ごみの中に、よく見知る赤銅色を見つけた。ふと顔を上げた彼女と視線がかち合う。紗雪は「あ」と声を上げた。

互いに歩み寄り、二人は向き合って足を止めた。

「どうしたの？」

「屯所に戻るところです。紗雪こそどうしたんですか？」

「何か甘い物でも作ろうと思って。市に行くところ」

「私塾は……」

「今日は休みよ」

「そうでしたか」

しばし無言が落ちた。

紫呉は、何か言うべきかと悩んでいた。里炎の組頭の弟である悠一と、彼女はそう浅くない繋がりが有る。

その悠一が処刑され、まだ日は浅い。

悠一の事に関して何か言及した方が良いのか、それとも何も言わぬ方が良いのか。

どちらの方が、彼女の傷を深めずに済むのだろうかと首を捻った。

紗雪は小首を傾げ、紫呉の顔を上目に覗き込んだ。

「……何か、もしかして私、氣遣われてる？」

見抜かれた事に驚く紫呉に、紗雪はくすりと笑った。

「平気よ。もう、私の中で整理は出来てるもの」

だから平気、ともう一度言って紗雪は俯いた。首筋の傷跡はもう完全に消えていた。

「……って言うか、まだ、実感が無いって言った方が正しいかも」
紗雪は無意識にだろう、傷の有った場所をすいと撫でた。

「……本名……、源悠一って、言うんだって思ったわ」
「……………ええ」

何と声をかければ良いのか分からない。ただ相槌しか打てない、
気の利かない自分を齒がゆく思った。

あの時、紫呉たちは里炎を壊滅せよという命を受けて動いていた。
その命を遂行せんが為、紗雪の存在を利用した。その事は紗雪も知
っている。

まだ悠一と繋がり浅いうちに、紗雪と悠一を引き離しておけば
彼女の傷も浅く済んだだろう。

だが紫呉はそうしなかった。徹底的に組を壊滅させると、由月に
命じられたからだ。

その命に異論を唱える事もできただろう。しかし、唱えずにいた。
優先すべきは紗雪一個人よりも如月だと、里だと理解していた。

それに、瑠璃に、如月に叛いた里炎に報いるべしと、自分自身そ
う思っていたのも有る。

紗雪の心情よりも、里と自分の思いを優先させた。その結果、彼
女の傷を深める事となった。

しかしそれでも構わないと、どこかでそう思っていた。紗雪がど
れだけ傷つこうとも、どれだけ怒りを覚えようとも、もう自分には
関係ない、と。

正体をばらし、利用していた事をばらせば、きっと彼女はもう自
分達に近寄ってこないと思っていた。畏れと怒りとで、近づく事を
厭うだろうと思っていた。

直接の交流を無くし、今後は遠巻きに監視対象として見張るつも
りでいた。しかし今でも、以前と変わらぬ親交は続いている。

紗雪は、これからもよろしくと言ってくれた。嬉しさと申し訳な
さで、どうしようもなかった。

責めてくれれば良いのに、と紫呉は思う。

自分を利用した紫呉を責め、詰って、蔑んでくれれば良いのに、と。

(……阿呆か)

自分が楽になりたいだけだ。責めてくれるのならば、許しを乞える。

「……何か、まだ実感無くてふわふわしてるの。多分もうちょっとしたら、色んな気持ちがガツて来てギャツてなってワーツてなると思うわ」

「分かりやすいですね」

紫呉は僅かに苦笑を漏らす。

紗雪の表情は明るくも暗くも無く、常の通りだ。紗雪自身が言うように、まだ実感が無いからだろう。

「その時落ち込むのか、よっしゃって思うのかは、私自身からないわ」

でも、と紗雪は笑って紫呉を見上げた。

「最近、悠一に会えて良かったとか、ありがとうとか、思う事が多いのよ」

「……良かった、ですか？」

「うん。十割良かったであってうじゃないけど。もちろん、こんな畜生ふざけんなって思う時も多いし」

自分の言い様に紗雪は苦笑する。

「……だって、おかげで黒官になりたいって気持ち、固まったからだから、ありがとうって、思う」

やっぱりむかつきはするけどね、と付け加えて紗雪は髪を耳にかけた。

「……紗雪は強いですね」

「は？ 強い？」

「ええ。とても、強いです」

紗雪はぱちりと大きく瞬いた。

自分には到底無理だ。騙していた人間を許すなど出来そうもない。

しかもその相手に感謝するなど、理解しがたい。だからこそ、凄と思う。

「紗雪のそういうところ、僕は尊敬していますよ」

紗雪は何度もぱちぱちと瞬いた。赤くなった頬をほりほりと指先で掻いて、ふいとそっぽを向く。

「……ふーん、そう。もつと褒めてくれてもいいのよ？」

紗雪は肩にかかった髪を、手の甲で後ろにぱさりと流した。分かりやすい照れ隠しに、思わず頬が緩む。紗雪はむっと唇を尖らせた。

「……ちよつと。何笑ってんのよ」

「すみません。馬鹿にしてるんじゃないんですよ？」

「じゃあ何なのよ」

「何でしょう。……ああ、微笑ましく思っていました」

「やっぱり馬鹿にしてるんじゃない……」

「してませんって」

「……まあ良いわ、渋々許してあげる。あんたは未来の義弟なわけだし」

「義弟？」

「うん。私が由月様と結婚したらあんたは義弟でしょ？」

「……まあ、確かにそうですが」

確かにそれはそうなのだが、いきなり話が飛躍していないか。

「楓も拓也さんと仲良くやってるみたいだし、私も負けてらんないわ。過去よりも未来よ。悠一なんかよりもつとずっと良い男捕まえなきゃ。だから今日はとりあえず料理の腕を磨くの」

「仲良く……？」

今、聞き捨てならない事を言わなかったか。

ぐつと拳を固めていた紗雪は、急に低まった紫呉の声に首を傾げた。

「……え？ うん。紫呉、二人の事知ってるの？ あ、影虎さんから聞いた？」

「はい」

仲良くとはどういう事だと口を開こうとした矢先、紗雪は喜び半分妬ましさ半分といった調子で言った。

「楓から手紙が来たの。拓也さんと旅行中なんですって。しばらくは色んな所回ってくるって書いてたわ」

「旅行……」

紫呉は呆然と漏らす。

どういう事だ。不可能に決まっている。だって拓也は既に死んでいるのだから。

「羨ましいわ。やっぱ男捕まえるのって字も大事なのかしら。相変わらず綺麗な字しちゃってさ。あー羨ましいーむかつくー」

口ではそう言いつつも、紗雪は友人の吉報に嬉しげにしている。そんな紗雪に真実を告げられようはずもない。紫呉はただ曖昧に返事を返した。

（…… どういう事だ？）

死人と旅行とは、いったいどういう事なのだ。拓也ではない別人と、楓は旅行に出かけているのか？ それとも別人を拓也だと思いこんでいるのか？ 馬鹿な。

もしや偽の手紙だろうか。いや、違う。紗雪は『相変わらず綺麗な字をして』と言った。手紙を書いたのは楓本人だという事だ。

（意味が分からない）

何故そんな手紙を出す必要が有る。何故だ。考える。

（…… 誰かに書かされたのか？）

誰かに浚われ、無事だと示すために書かされたのではないか？

もしや楓の生家にも同じ手紙が届いているのではないだろうか。

ならば、両親が娘の不在を案じていない事も頷ける。

だとすると、いったい誰が楓を浚ったのだ。楓を浚って利益を得る者は誰だ？

（…… 男を殺した犯人か）

目撃していた楓が、壱班に駆け込むのを封じる為か。

いや、待て。では何故、紫呉の元には誰も来ない。紫呉も拓也殺

害の現場にいた。だというのに、特に誰かが自分を監視している気配も無ければ、接触を図ろうとしている気配もない。

ああ、そうか。紫呉が立証できぬと分かっているからか。いくら紫呉が壱班に訴えたとして、紫呉の証言以外に証拠は無い。遺骸も凶器も無い。目撃者も無くしてしまえば、紫呉は身動きが取れない。

この考えを真実と仮定するなら、全ての事柄に一応の筋道は通る。
(だが固執するな)

他の可能性だって有るのだ。いくら筋が通ろうとも、推論の域を出ない。

「……あの、紫呉？ どうしたのよ怖い顔して……」

恐る恐ると紗雪が尋ねてくる。紫呉ははっと気付いて謝った。

「すみません。何でも無いです」

「私、何か怒らせるような事言った？」

「いえ、そういうわけでは……」

だったら良いけど、と紗雪は長靴の爪先で土を掻いた。

「あんた只でさえ表情薄くて普段から怒ってるみたいな顔してるんだから、いきなり黙られたらびっくりするわよ」

「……申し訳なく、思いはしますが。……何だか不愉快です」

散々な言われように、紫呉は憮然と言い返す。

「あはは、ごめんごめん。あ、そうだ。由月様もそんな感じなの？」

あ、と指を立て、紗雪は少しばかり不安げな表情を浮かべた。

「そんな、とは？」

「無表情で無愛想で慇懃無礼。自分の旦那が常にむっすりしてたら嫌じゃない」

「喧嘩売ってるんですか？」

「ちよっと、睨まないでよ怖い」

「睨んでません」

少し目を細めただけだ。そんなに自分の目つきは悪いのかと、若干虚しくなる。

紗雪はしてやったりという顔をして、くすくすと笑った。

「ちょっとした意趣返しよ。いきなり黙られて無視されたみたいで、腹立ったから。で、どうなの？」

「どうって……ああ、兄様ね」

「そう。ちょっとでも多く知っておきたいのよ」

紗雪は両手の指を組み、きらきらと目を輝かせた。

紫呉は首を傾げ、視線を宙にやり、脳裏に兄の姿を思い描く。

「……どう、なんでしようねえ……。とりあえず、慇懃無礼どころか普通に尊大ですよ」

由月の傲岸な態度を思い描きつつも、紫呉はふと思う。そうか、自分は慇懃無礼に見えているのか。まあ別に構わないが。

紗雪は眉を寄せ、顔を暗くした。

「えー……無駄に偉そうな男って嫌ね……」

「実際偉いですけど」

「そうよねえ……偉いんだものねえ……。うーん……身分もお金も言う事無いし……、顔も良いのよねえ……」

「顔が取り得みたいなのところはありますね」

「褒めてないわよね、それね」

軽く握った拳を顎にあて、紗雪はうんうん唸る。表情は真剣そのものだ。

何にせよ、元気そうで何よりだ。元気すぎて、逆に心配ではあるが。空元気ではないかと疑ってしまう。

だがもし空元気なのだとしても、言葉をかけるのは野暮か。平気だと、紗雪は言っているのだから。

「ま、会う前からぐだぐだ言っても仕方ないわよね。まずは会えるように頑張らなきゃ」

紗雪はぐっと両手の拳を固めた。

「とりあえず今日は料理して、その後がつり勉強する事にするわ。あ」

空を見上げる紗雪につられ、紫呉も上を向いた。先程よりも暗雲が濃くなってきた。

「雨降りそうね。降られる前に買い物済ませなきゃ」

「すみません、足止めをしまして」

「ううん。それじゃあまたね」

「はい。お気をつけて」

紗雪は手を振り、雑踏を足早にすり抜けていった。

紫呉に背を向ける一瞬前、沈鬱な表情を浮かべた気がした。
低く遠雷が轟いた。

4 稲光

屯所の戸をくぐる。ごろごろと低い雷鳴は今も続いているものの、まだ雨は降り出さない。

紫呉は自室から縁側に出て、空を見上げた。先程よりも雲は厚く垂れ込んでいる。暗さも増した。

湿気を多く含んだ風が髪を揺らす。低い位置を羽虫が飛んでいる。じきに雨が降る事は確実だ。

空を見上げる。また一つ雷が鳴った。だが雨は降らない。

降るなら降るで、さっさと降ってほしいものだ。はつきりしない。鬱陶しい。

紫呉は室内に戻り、縁側に面した障子戸を閉めた。

とりあえずは先日から着たきりになっている衣服を着替えるかと、袴の結び目に手をかけた。

が、ぴたりと動きを止めて押入れを見やる。ほんの僅かな隙間が有った。

紫呉はどちらかと言えば大雑把な質だ。決して几帳面ではない。現に自室は相応に無秩序である。

しかし、こういった隙間の類は苦手なので、箆笥だの押入れだの障子だの襖だのは、きつちりと閉じるようにしている。昔、隙間からどうこうという類の怪談話を聞かされた所為だ。

別に怖がっているわけではない。決して怖いわけではない。単なる癖のようなものだ。そうだ、別に怖いわけではない。

一つ息を吐き気を落ち着け、紫呉は押入れに向かった。閉じようと手をかける。と、中の人とぼつちり目が合った。閉じよう

勢いよく開く。スタンと高い音が鳴った。

「何をしているんですか」

「あ、気にせず着替えて」

押入れの中、布団に包まった状態の須桜は何事も無いように平然と言った。

「自室の押入れに見知らぬ小太りのおっさんがみっしりと詰まっていたら、誰だって気にします」

「え、あたしって見知らぬ小太りのおっさんと同じ扱いなの？」

「むしろ見知らぬ小太りの汗かきのおっさんと同等です」

「紫呉、それはおっさんに失礼だと思う。おっさんだってなりたくて汗かきになったんじゃないし、なりたくて小太りになったんじゃないと思うの」

「うるさい。さっさと出る」

「もー……ケチー」

「ケチじゃない」

須桜は頬を膨らまし、ずるずると押入れから這い出した。布団に包まっていた間に乱れたのだろっ、長い髪が眼前に垂れ、実に不気味な光景である。

「で？ 何なんですか」

座って髪を括り直す須桜を横目に、紫呉は押入れをきっちり閉じた。

「仮眠よ。ちよつと休憩しようと思って」

「仮眠するなら自分の部屋でして下さい」

「だって紫呉の何らかが身近に欲しかったんだもん」

須桜は言いながらじりじりと膝立ちでにじり寄り、胡座した紫呉にがばりと抱きついた。

「あーでもやっぱり布団よりこっちのが良いわー、生は違うわー」

胸元にぐりぐりと頬ずりをしてくる須桜の頭を引っ掴む。

「気持ち悪いんですけど」

「気にしなーいのー」

「気にします」

べたべたと背やら脚やらを撫で回す須桜の肩を掴み、べりっとな音がしそうな程の勢いで紫呉は須桜を引き剥がした。

「えーやだ。もつと」

「断る」

「紫呉のケチー」

「ケチじゃない」

須桜の肩を半ば突き飛ばすようにして離すと、須桜は勢いに任せころりと転げた。不満の声を上げる須桜は無視し、少しばかり乱された単を整える。

別行動の後は大概こうして、須桜はふざけたフリで——フリだという事しておくが——紫呉の怪我を確認する。もし怪我をしていたとしても、紫呉は須桜に告げぬ事が多いからだ。

軽症ならば、わざわざ須桜の手を煩わせるまでもない。それに、怪我を負った自分が情けなくみじめで、人の手を煩わせる自分が嫌になるのだ。

ついでに言えば、心配をされるのも嫌だ。いや、心配をしてくれる事は嬉しく思う。だが、心配をかけさせる自分が嫌だ。自分の力不足が嫌だ。

だから言わない。怪我を隠す。

紫呉の心情を慮って、須桜は心配している事を隠そうとする。ならば紫呉も、須桜の気遣いを慮って心配されている事に気付いていない事にする。

自分の小さな矜持を守りたいが為に、須桜には面倒をかけてしまっている。

それは分かっている。ちつぱけな矜持だと自身でも思う。だがやはり捨てきれない。

「須桜」

畳に広がる須桜の髪を一束掴み、つんと引っ張る。体を起こした須桜が首を傾げた。

「……………何でもありません」

面倒につき合わせてしまっている礼なり何なりを言おうとしたのだが、いざ面と向かうとどうにも言い辛い。結局は口ごもり、須桜

に背を向けた。

須桜が笑う気配がして、次いで背中にも重みを感じた。首を巡らせる。須桜が紫呉の背に背を預け、膝を抱えていた。

「そうだ。影虎が鳩飛ばしてきたの」

肩越しに渡された文を開く。昨日の一件に関する事や、雨が降る前に洗濯物を入れておけという指示があった。

「洗濯物は？」

「居間。面倒だから畳んでないけど」

濡れると影虎の機嫌が悪くなる。それは避けたい。

「……あ。雨、来ましたね」

「ほんとだ」

ぽつ、と地面を叩く音がしたかと思っただけなのに、叩きつけるような土砂降りの雨に変わった。

障子越しに稲光が差し込んだ。しばらくの後、雷鳴が響く。そして廊下を足音高く駆ける音がしたかと思えば、勢いよく襖が開いた。「よっしゃ、間に合った！」

濡れずにすんだー、と影虎は安堵の声を漏らす。

「おかえりなさい」

「おー、ただいま。須桜、お前どうせなら畳んどけよ」

「えー……。どうせあたしが畳んでも、もったきつちり畳めとかうるさいじゃない」

「それとこれとは別だろ」

「別じゃないわよ」

「つか、お前ら何仲良しやってんの」

背中合わせに座る二人を見下ろし、影虎は不審そうに眉を寄せる。須桜が肩を揺らして笑った。

「羨ましいでしょー」

「まあな。よし、俺もまぜろ」

「うわ、ちょ、影虎重い！ 痛い！」

須桜を丁度間に挟み、影虎は紫呉の首に両腕を回して体重をかけ

る。

「重いつてばもう！」

「うっさい。紫呉お前体軟らかいな」

「毎日柔軟してますから」

両の足裏を合わせたまま、体重をかけられるにまかせ前のめりになる。紫呉は畳に額をつけた。

「首尾はどうでした？」

「結局見つからず仕舞い。壱班にも帰りに寄ったけど、捕まえた奴らも吐かず仕舞い。お前そのまま開脚とかも出来んの？」

「出来ますよ」

脚を開け、腹を畳みにぺたりとつける。ついでに前に腕も伸ばす。

「うわ、気持ちわるっ」

「どいてよー！ 重い重いつぶれる！」

「軟らかい方が便利じゃないですか。怪我もしにくいし」

「まあなあ。お前俺の顔まで普通に蹴り届くしなあ。でもその状態はやっぱきもいわ」

「そうだ。須桜も首尾はどうでした？」

「戸籍調べて来たけ、どいてってば！ もう！！」

「あだだ蹴るなっ」

ぼやきながら影虎は緩慢な動作で退いた。

ぜえはあと荒い呼吸をしている須桜の髪は、先程整えたばかりだというのにまた崩れてしまっている。

「もうっハゲ虎のばか！」

「お前が自慢するから悪いんですー、あと洗濯物も畳んでねえのが悪いんですー、あと俺は禿げてませんー」

「ああもう鬱陶しい！ 小姑！」

「お前みてえな嫁とか勘弁だっつの」

「……となると、僕と須桜が夫婦で、僕と影虎が父子ですか」

それは何というか、勘弁願いたい気がする。

髪を括り直すのが嫌になったのか、須桜は結局結い紐をほどいた。

首を振って、括り痕のついた髪を散らす。

「言われた通りちゃんと調べたわよ。おかげで寝不足。見てよこの隈、兄貴じゃあるまいし」

目の下を擦り、須桜はぶつくさと不平を述べた。

「で、どうだったよ」

「見つからず」

須桜には拓也の戸籍を調べるよう頼んでいた。肩を竦め、やれやれといった身振りで須桜は嘆息する。

「二十代男子の戸籍はくまなく調べたわ。でも条件に合致する瀬川拓也はいなかった。字違いの『たくや』はいたけどね。もしかしたら他人の名前を借りてるのかとも思っ、他の年代の男子も調べた。何人か『瀬川拓也』が見つかったから、一応写しは取ってきたわ。あたしの部屋に置いてる」

「ありがとうございます」

「お礼は体で払ってよ」

にやりと笑って、須桜は紫呉にしがみついた。鬱陶しい事の上ないが、断って風呂だの寝床だの押入れたのに侵入される可能性を考えれば、これで礼になるのだと思えば逆に安いものかと思いききにさせた。

「が、やはり鬱陶しい。と言うより暑苦しい。肩を掴んで引っぺがす。」

「しかし、偽名という可能性は無いんでしょうか」

「無いと思うぜ。楓ちゃんはそのうち瀬川楓になる」つつてたし。拓也って呼んでたし。可能性は零ってわけじゃねえけど、やっぱぼぼ零だと思っ。惚れた相手にゃ本名で呼ばれたいだろ」

「粹な事を言いますね」

「っはは、お褒めに預かり光栄ですわ」

高い女声を作って言い、影虎は立てた膝に肘をついた。

紫呉は足元に寄ってきた黒豆を撫でた。柔らかな毛並みは湿気を含んでいる。

「しかし、瑠璃に戸籍が無いとなるとさ」

「……玻璃か」

影虎の言葉尻を奪い、紫呉は言った。

紫呉の声に、二人は視線を上げた。

障子越しの稲光が、二人の顔に陰影を落とす。

雷鳴が轟いた。

雨足は強くなりつつある。

5 龍虹

二

雨は昼下がりにやみ、雲間から光が差し込んだ。生ぬるい風が雲を散らし、青空が覗く。

随分久方ぶりに青空を見るような気がした。加羅は手庇を作って空を見上げた。午後の陽を受けて、手首の瑠璃の数珠が煌いた。

青空には虹が見える。

瑠璃の里は祭りの準備で賑わっていた。

立ち並んだ屋台は、祭り当日に向けて仕入れに大忙しだ。日雇いの人足は、奉納舞を捧げる舞台や櫓の設営に取り掛かっている。

「わぷ」

どん、と腰の辺りに衝撃が走ると共に、幼い声が聞こえた。加羅にぶつかった勢いで後ろに転びそうになる幼子の手を、慌てて掴む。

「ありがとう」

七つか、八つほどだろうか。女の子だ。にこりと笑った顔は無邪気そのもので、思わず加羅の頬にも笑みが滲んだ。

「気をつけて」

「うん。ね、おにいちちゃん見て。虹」

加羅の袖を引っ張り、幼子は空を指差した。加羅は屈んで、幼子の視線の高さに合わせる。

「うん、綺麗だね」

「きれい！」

手を叩いてはしゃぐ幼子の髪を撫でてやる。その髪は素直で柔ら

かく、指先に心地良かった。

「こんな伝説知ってるかな。あの虹はね、炎と龍なんだ」

「そうなの？ 知らない」

「赤い炎と、それぞれ三色で彩られた二頭の龍。空駆けの焰と、龍の伝説だ」

「知らない。でもお月さまにお花が咲いてる事は知ってるよ」

「物知りだね」

ぼん、と頭を撫でると、幼子は得意げに胸を反らせた。

「桔梗のお花が咲いてるんだよ」

「そうなんだ」

古くから瑠璃に伝わる伝承である。加羅も知っている話だが、知らぬ顔で驚くフリをした。

ふいに幼子が雑踏に首を巡らせた。母親だろうか、上品な女性が幼子の名を呼び手招いている。

「お母さんだ！ じゃあねっ」

「うん。転ばないよう気をつけて」

大きく手を振る幼子に、手を振り返す。やがて幼子の姿は雑踏に飲まれ、見えなくなった。

加羅は立ち上がり、後方へと視線を流した。

「何の用だ、斉藤」

小路から人影が姿を現す。

「おや、気付いていらしたんで」

「何の用だ」

加羅は男と向かい合い、腕を組んだ。

「子供にはお優しいです、ね」

男はくつくつと肩を揺らす。常の笑みが剥がれている事を自覚しつつ、加羅は不愉快な思いで男を見た。

男の名を、斉藤汀という。

三十路がらみの男だ。懐手の着流し姿に、縞の羽織。彼が歩く度に高下駄がからこると音を立てる。

ほとんど白に近い薄茶の髪に、まるで糸のように細い目。体温を感じさせぬ容貌は、どこことなく爬虫類を思わせた。

「斉藤」

さつさと用件を言えと言外に滲ませて、彼の名を呼ぶ。

「いえ。特に用といった用は無いんですが、ね」

汀は、くつと喉を引き攣らせるようにして笑った。真意の見えない目を、加羅は瞳に力を込めてじっと見つめ返す。

しばし沈黙が落ちた。賑やかな喧騒が鼓膜を振るわせた。

「瀬川くんの事なんですが、ね」

笑みを湛え、汀が口を開いた。

「あの背中への傷。一撃ですよ、ね」

「……だから何だ」

「相当の腕前だよ。すごいよね。いったい誰だろう、ね」

すごいよね、と汀はもう一度繰り返した。汀から視線を逸らさず、加羅は組んでいた腕をほどき腰に片手を当てた。

「瀬川の恋人が犯人を見ていたと、そう言ったはずだ」

「ああ。そう言えばそうでした、ね」

汀は懷の中で腕を組みかえる。

「その恋人くんは、今はどこに？」

「今日も元気に犯人を憎んでいるさ」

「犯人、ね」

汀の視線が加羅に注がれる。加羅は何も言わず、その視線を受け止めた。

「……楓、と言う名だっけ。可哀そうだよ。うん、可哀そうだ」

「妙に気にかけるんだな」

「そりゃあまあ、ね。瀬川くんは元ぼくの部下なわけだし、ね。その恋人となつちゃ、一応気にかけるのも致しますよ」

汀は薄い唇を笑みの形に曲げた。

「それじゃあぼくは、一旦戻る事に致しますよ」

ぺこりと会釈し、汀は加羅に背を向けた。数歩進んだところでぴ

たりと足を止め、こちらを振り返る。

「ああそうだ。……転ばないよう、気をつけて」

先程加羅が幼子に投げた言葉をそのままに、優しげな声音で汀は言った。

眉を顰める加羅を愉快そうに見つめ、汀は踵を返した。

加羅は舌を打ち、伸びた前髪を掻き乱す。

虹はもう消えていた。

6 夜語

紫呉は昔、夜を恐れる子供だった。自身を取り巻く、濃密な暗さが恐かった。

相手の顔も見えない。姿もあやふや。このまま暗闇に吞まれてしまい消えてしまうでは、と思っていた。

それにきつと自分もいつかはこの暗がりと一緒にたになって、誰からも見えなくなってしまうのだと思い込んで勝手に恐怖していた。

幼い頃、泣きながら兄の寢床に逃げ込む度に、月の名を冠する者がそれでどうすると窘められた。

震えてしがみつく紫呉の背を撫で、兄は言ったものだ。

何も恐れなくて良い、夜は暗闇じゃない。

そう言つて空を指差した。空には満月が照っていた。

懐かしく思いながら、紫呉は縁側から庭に降りた。

今夜は月が見えない。雨はやんだものの、雲はまだ厚く垂れ込み夜空を覆い隠している。

幼い頃は、新月の夜も恐かった。月が無くなってしまったと、しよっちゅう涙していた。

しかし今は、姿が見えずとも月は変わらず存在している事も分かっている。

寝間着の裾を汚さぬように尻端折る。懐から煙草の箱を取り出し、一本啜えた。

燐寸を片手で擦るも上手くいかず、ぱきりと折れてしまう。自分の不器用さは筋金入りだ。紫呉は諦めて両手で擦った。

息を吸いながら煙草に火をつけ、燐寸を振って火を消す。独特のにおいが香った。

煙を肺まで深く吸わぬよう、紫煙をくゆらせた。

紫呉は殉死者の碑の前で足を止めた。碑の前には煙草の箱が供えてある。雨に濡れていた。

中を確認する。中の煙草まで濡れていた。

勿体ない事をした。雨が降る前に気がつけば良かったのだが。

紫呉は濡れた箱をどかし、懷から取り出した新しい箱を供えた。

啜っていた煙草の灰を落とし、線香立てに突っ込んで立てた。

虫の囁きが聞こえる。ここしばらく日中は蒸し暑い日が続くが、夜になれば涼しいものである。多く含んだ湿気は不快だが、風はひいやりとしていて心地良かった。

そう言えば、いつから自分は夜が怖くなくなったのだろう。おそらくは十かそこらの頃からだったように思う。

それまでは、兄の言葉に支えられてきた。

恐くなったら、月を思い描きなさい。桔梗の花を思い描きなさい。葉、茎、花卉。順に思い描けば、落ち着いてくるから。

その言葉に何度慰められたか知れぬ。

兄の慰めを必要としなくなった頃には、自分の姿を隠してくれる夜は味方にもなるし、同時に害なす者の姿を隠す敵にもなると分かっていた。

そしてその頃は、翔太の言葉が支えだった。

恐いなら、お前の好きなものを思い描けば良い。そうしたら、心強く思えるから。

今も昔も、これからもずっと、自分はその言葉を頼り続けるだろう。

碑に刻まれた矢岳翔太の名は、夜闇に濡れて見えずにいる。だが見えぬだけで、そこに名が刻まれている事は確かだ。

紫呉は、先程備えた煙草の箱から一本取り出して啜えた。片手で燐寸を擦る。だがやはり上手くいかない。

紫呉に煙草を教えたのは翔太だ。酒と賭け事も教わった。何なら女も教えてやるよと翔太はにやにや笑ったが、それは遠慮した。翔太は片手で燐寸を擦るのが上手かった。それが何だか格好良く思え、自分も真似をしたのだが上手くできず、悔しい思いをしたものだ。

今も彼を真似て片手で擦ろうとするが、やはり徒勞に終わった。数本を無駄にしたところで諦め、紫呉は両手で燐寸を擦った。

片手で風よけを作り、煙草に火をつける。燐寸の灯火を受けて、手首の水晶の数珠が赤く光った。

今度は深く吸い込んでから、大きく吐き出した。紫煙が眼前をゆらゆらと立ち上っていく。燐寸を振って火を消した。

体の芯が冷えるような、頭にかかった霞が晴れるような、不思議な心地がした。

「濡れんぞ」

背後からの声に、紫呉は内心驚いた。だがその驚きを飲み込み、何でもないような顔をして振り返る。

影虎は腕に伝鳥を乗せていた。紫呉と同じように、裾を尻端折っている。洋袴の裾も折り返していた。

「また雨降りそうだしさ」

「……そうですね」

影虎の言うとおり、湿気が増してきている。肌がべたついた。

いつから居たのだ、と問おうとしてやめた。気配に気付いていなかったのだと、自分から申告する必要は無い。

つくづく自分は、二影の前では見栄を張りたがる。

自身に呆れつつ、紫呉は煙草の火を消して線香立てに押し込んだ。「どなたです？」

「由月」

影虎の腕から伝鳥を移すなり、伝鳥の嘴から兄の声が勢いよく飛び出した。

「紫呉、明日一番に帰ってきなさい」

「……はい？」

「私に同じ事を二度言わせるんじゃない。明日一番に帰ってきなさい、と言ったんだ」

唐突な命令に、紫呉は瞬く。影虎も目を丸くしていた。

「理由を伺っても？」

「破天から不埒な手紙が届いたのさ。奉納舞の時に、私を殺してやる、とね」

由月の声は愉快そうだった。

「だから、帰ってきなさい。私の代わりをお前が務めるんだ」

「って、おい。そりゃひどくね？ 紫呉なら殺されても良いって？」

影虎が伝鳥の首を掴み、己の方を向けさせた。

「おや影虎。まだ居たのか」

「いちや悪いか。亮ねえも青生も赤官もいるんだし、別にお前が舞っても問題ないだろうよ」

「私に意見するとは上等だね」

「そりゃ意見もするつつの」

「お前の言い分を借りるなら、紫呉が舞ったところで問題は無いだろうに。お前も須桜も赤官もいるのだから。それとも、護る自信が無いのかい？」

「んなわけねえだろ」

「なら構わないだろうに」

「けどさあ……」

言い募ろうとする影虎を紫呉は制した。

「兄様、お言葉ですが僕も疑問に思います。僕が代理をせねばならぬ程に危険なのですか？」

「ああ。手紙は中々の念の入れようだ。それもあちらこちらに届けられている。襲撃予定地かもしれない。違つかもしれない。分からないが、人手を割く必要がある。つまりは櫓周辺に配置する赤官の数は減る。壱班だって、当日は里中の警備で忙しいからあまり当てには出来ないさ」

由月は一旦言葉を切り、深く息を吸った。

「式班の仕事を言い訳にはさせないよ。お前たち駐在隊員の他にも隊員はいる。そちらに任せれば良い。鳥獣隊の仕事も同じくだ。柊親子と橘兄弟に任せれば良い。屯所の猫だって元は半野良だろう、放っておいても平気だろうよ」

断る理由を片端から潰していく由月に、紫呉は言葉が継げないでいた。

「式班にも鳥獣隊にもお前の代わりはいるが、如月の代わりが出来るのはお前しかいないんだよ。父上にして頂くなどもってのほかだ。父上を危険に晒すわけにもいかない。分かったなら帰ってきなさい」
言うだけ言って、由月は一方的に会話を終えた。伝鳥の瞳から、ふっと輝きが消える。

報酬をねだる伝鳥を宥めつつ、紫呉は心の底から大きな溜息をついた。

「……面倒臭い……」

「本音すぎるだろ」

苦笑しながら、影虎が紫呉から伝鳥を受け取った。

「だって、舞の稽古とか今から始めるわけでしょう？ あと楔もするわけでしょう？ 面倒臭い。心底面倒臭いです」

「お前正直なあ」

「兄様の言う事は最もですが、逆らう気も有りませんが、……あ、……」

影虎は肩を揺らして笑った。

それにしても、本当に面倒である。

指先の動き一つ足運び一つ注意せねばならぬような、面倒な舞など練習したくない。向いていない。

この湿気が多い時期に、あんな装飾過多な衣装など着たくない。面も暑い。

楔だって、暇で暇で仕方がない。楔場に日がな籠りつきりなど堪ったものではない。

縁側から部屋に戻る。伝鳥に褒美を与える影虎を横目に、ぐつたりと座り込み紫呉は頂垂れた。

「あ、影虎。お先ー」

「おー」

ふわりと石鹸の香りが漂う。洗い髪を浴布で拭う須桜を見上げ、紫呉は疲れた声で言った。

「須桜、帰る準備をしておいて下さい」

「へ？ 何で？」

「兄様のご命令です」

楔となると支曉殿に籠りきりになるので、今追っている最中の破天を自ら追えない。他の式班の面子を信用していないわけではないが、多少なりとも不安というか、放り出されたような気分になる。拓也の一件も直接関われなくなってしまう。だが兄の命令には逆らえぬ。

それに、兄の言い分は確かに最もだ。自分が舞うのが一番良い。もし何か有ったとしても、里への損失はさして無い。

となれば、うだうだ言っているも仕方がない。面倒なことに変わりはないが、前向きに捉えるのが賢明だろう。

そう思うがしかし、気分は重い。兄に恨み言をぶちまけたい気分だった。

……十倍になって返ってきそうなので、絶対にやらないが。

7 早朝

まだ日も昇りきらぬうちに、三人は忒班の屯所を発った。残すべき言伝はきちんと残したし、黒豆の事も一応崇に頼んでおいた。

後憂の芽は摘んでおいたが、紫呉の胸中は漣だっている。

兄の言い分に納得はしている。だがこれから支曉殿に籠りきりになるのかと思えば、やはり面白くない。

もやもやとした気持ちを溜息に変え、紫呉は歩を進めた。

朝上がりの空気は多湿であったが、まだ温度が低いため不快ではなかった。

里の中央森には朝靄が立ち込めている。木立は陽光を遮り、森は暗い。下生えを踏みしめる足元に、枝葉の影が落ちた。

森を抜けると、開けた地がある。

その中央に支曉殿、左右には左影舎・右影舎。それらをぐるりと取り囲むようにして、七官舎があった。

急に明るくなった視界に、紫呉は目を細めた。夜雨に濡れた甍がきらきらと光っている。棟飾りの瑠璃細工が、一際眩しく煌いていた。

紫呉は一息ついた。足をとめた途端、汗がじわりと滲んだ。

「あ」

支曉殿の門戸の側に、蛙の姿を発見する。親指ほどの大きさの蛙だ。駆け寄って、掌の中に閉じ込めた。

「どうすんだよ、それ」

影虎は訝しげな顔で、紫呉の掌を見つめた。蛙は掌の中でぴよこぴよこ動いている。

「兄様に差し上げたら、どのような反応をされるのかと思ひまして、ちよつとした意趣返しだ。由月の言い分は最もだし納得もしているが、素直に言いなりになるのは何となく面白くない。これくらい

の嫌がらせなら、許してくれ……は、しないか。

「……やめておいた方が賢明ですかね」

思いもよらぬ方法で報復されるような気がする。

「由月様を撃退したいなら、いくらでも薬処方するわよ」

ぐつと拳を握って、須桜が言った。大きな瞳が楽しげに輝いている。

影虎が唸りながら首を捻った。

「いや、でもあいつは蛙ごときじゃびびらん気もするけどなあ。いつそ素っ裸になって逆立ちして由月の部屋行くとか」

「ついでにその蛙、頭に乗せてっちゃえば？」

「何なら俺も協力するぜ。脱ぐのも辞さんぞ」

「あ、じゃああたしも。蛙も辞さんぞ」

二人は乗り気だ。由月が慌てふためく様子を見てみたいのだろう。紫呉は蛙を頭上に乗せた。が、蛙は解放を喜んですぐに跳んでいつてしまった。

「……まあ驚いては下さるでしょうが、楽しめるような気もします」

それでは駄目だ。楽しませては意味がない。

結局、何もせずにいるのが一番賢明なのだろう。残念ではあるが真理だ。

袖口で汗を拭い、支曉殿の門戸をくぐる。玉砂利を踏み、母屋に向かった。

磨き上げられた廊下に、丸窓から光が差し込んでいた。丸窓の外には緑の庭が見える。

草履を脱ぎ、兄の私室へと向かう。

支曉殿は、しんと静まりかえっていた。衣擦れの音すら鮮明に聞こえる。

紫呉は無意識に息を潜め、足音を殺して歩いていた。

影虎も須桜もそれは同じだったようで、顔を見合わせ笑い合う。

「こつも静かだね」

言い訳じみた紫呉の声も、低く小さな声だった。

それに笑っていた二人だが、ふと表情を消して、動きをとめた。その理由を察し、紫呉も少しかり身構える。

遠くから、どたばたとうるさい足音が近づいてきていた。足音は左影舎の方から響いてくる。

二人は、見るからに嫌そうな顔をしていた。

足音の持ち主が、廊下の角から姿を現す。

「お前たちどこも怪我はしていないか今なら青生がいくらでも診てやるぞ！」

目の下に隈を貼り付けた青生は、廊下を踏み鳴らしながらこちらにやって来た。

あいもかわらず元気だ。若干気圧されながらも、紫呉は青生に会釈する。

「おはようございます。それから、お久しぶりです」

「久しいな紫呉！」

がっとう手を掴まれ、ぶんぶんと上下に振られた。

「もー、兄貴朝からうるさい」

耳を塞ぐふりをした須桜が、呆れた顔をして言った。

「青生には朝も昼も夜も関係ないぞ」

「あたし達には関係あるの。てか、またお風呂入ってないでしょ」

須桜の言う通り、青生は髪も肌もことなく薄汚れていた。医療着にしみついた薬草・薬品臭にまじって、汗のおいもする。

「風呂に入る暇が有るなら薬をいじる」

「もー……」

須桜が片手で目元を覆って仰向いた。

青生と接しているときの須桜は、普段よりも少しかり大人びて見える。ついでに常人に見える。不思議なものだ。

「由月の代わりを務めるらしいな可哀そうに」

紫呉に向き直った青生が、にっと笑った。

「何やら気合の入った脅迫状というのかそんな物が届いていたから

「なだが安心しろいくらでも青生が治療してやる」

「不吉な事言っとなっつーの」

「おお影虎静かだからどこぞの誰かにとっ捕まって喉でも焼かれたのかと思っっていたぞ」

元から大きな目を更に丸くして、青生は皮肉を吐いた。

「んなへましねえよ。お前と喋ると疲れるから黙ってたんだよ」

「相も変わらず礼を失した奴だな不愉快だぞ」

「うっせ。何の用だよ」

「薬草園に行く途中に渡殿からお前たちの姿が見えたから来ただけだ」

特に用は無い、と言い残して青生は外へと駆けていった。

まるで嵐のようだ。

その背中を見ながら、紫呉はぽつりと呟く。

「……相変わらず、力強いというか勢いの有るというか」

「良く言えばな」

「ただのアホよ」

二人は半眼になって、低い声で漏らした。

何だかんだで紫呉は青生と付き合いが薄いが、二人はそうではない。

須桜は彼の妹だし、影虎は歳が近いし付き合いも長い。自分と比べ、実験台にされた回数も違っただろう。手厳しくなるのも頷ける。

「……何か無駄に疲れた。由月に会ったか、もっと疲れにやならんつてのに」

「確かに何か緊張するわよねえ」

影虎が肩を落として言い、須桜もうんうんと深く頷いた。

紫呉も同意を返そうとした、その時だ。

「お前は本当、礼を失しているね」

突然の声に、三人は三者三様にびくりと肩を跳ねさせた。

ぎしぎしと強張る首を巡らせ、紫呉は後方を向いた。

そこには懐手をした兄がいた。差し込む陽光を後光代わりにした

様は、まるで一枚絵のようであった。

身につけた単は地味な色合いではある。だが浮かぶ同色系での縫い取りは、微細で豪奢だった。

非の打ち所が無い堂々とした態度に、無条件に緊張を誘われた。

「……お久しぶりです、由月兄様^{ゆつき}」

首に次いで体も、ぎしぎしとゆっくり向き直らせる。

十も歳の離れた兄は、形の良い唇に優しい笑みを浮かべて頷いた。首肯に合わせて、背に流した夜色の長い髪がさらりと揺れる。

同じく笑みを湛えた母譲りの濃紫の目は、涼やかでありながら優麗であった。

図らずも兄の陰口を叩きかけていた紫呉には、その目が自分を責めているように思えて、どうにも落ち着かなかった。

「もう少し遅くに来ると思っていたんだが。いや、結構だ」

由月は懷手を解いた。手にした扇を逆の掌に打ちつけ、軽くぱんと音を鳴らす。

その音に、思わず背筋が伸びた。

「……つか、こんな朝っぱらから外で何してたんだよ。散歩か？ 爺かってんだ」

気まずさを誤魔化すかのような影虎の皮肉に、由月はわざとらしく秀眉を上げた。

「残念な男だな。礼を失っている上に口も悪い、風流も解さない。実に残念だ」

「うっせ」

吐き捨てて、影虎は紫呉の背後に隠れた。とは言え、紫呉よりも影虎の方が体格に優れているから、隠れきっていないのだが。

同じく須桜も、さりげなく紫呉の後方に身を寄せた。気後れしているようだった。

くつくつと笑い、由月は閉じた扇で丸窓の外を指した。

「見なさい。雨露に濡れた木々は何とも美しいじゃないか。側で愛でたいと思うものだろうに」

由月は優美な手つきでゆつくりと扇を広げ、笑んだ口元を隠す。芝居がかった仕草が嫌味ではなく、むしろ似合っていた。

弟とはいえ、自分が同じ事をしても全く絵にならないだろう。滑稽なだけだ。それ以前に多分、扇を広げるだけで一苦労しそうである。

「兄様、それで僕は如何すればよろしいのでしょうか」
話を逸らすがてら、紫呉は本題をふった。

由月は、ツイとこちらに視線を滑らせる。

「来なさい」

紫呉たちを追い越し、由月は自室へと足を運んだ。香がふわりと匂う。

「……あいかわらず気障な奴」
面白くなさそうに、影虎が小さく呟いた。

その声が聞こえているのか聞こえていないのかは知らないが、由月は振り返る事無く廊下を歩んでいく。

ぴんと伸びた背筋に、上品な足運び。立居振舞はとことん洗練されている。

相変わらず我が兄ながら見事なものだと、紫呉は萎縮すると同時に感心した。

8 書状

由月の私室は、一片の乱れも無くきれいに片付けられている。少しでも乱せば兄の不興を買いそうで、緊張に体が強張った。

部屋の隅には、影亮が疲れた面持ちで座していた。由月を見上げた視線は、随分と恨めしげである。

影亮は口を利くのも億劫だと言う様に、無言で書状を由月に突きつけた。影亮の視線を笑顔でいなし、由月は書状を受け取った。

影亮は口元に苦笑を貼り付け、三人に会釈した。立ち上がり、足早に退室する。

声をかけられる雰囲気ではなかった。とにかく、疲れきっている様子だった。

須桜は気遣わしげに影亮の背を見送っている。

「座りなさい」

はっとして、紫呉は由月のもとに足を運んだ。

折り畳まれた書状を渡される。

紫呉は下座に正座して、それを両手で受け取った。背後に座した影虎と須桜が膝行して近寄り、紫呉の手元を覗き込んだ。

書状を開こうとするが、何かが糊になっているのか中々上手く開けられない。

紫呉は破らぬように気を払い、慎重に書状を開いた。

「……これはまた」

念入りのものだ。

赤黒く染まった書状は、どこまでも禍々しい。

血文字に目を注ぐ。文として成り立っていない。めちゃくちゃに文字を並べているようだった。

文字は紙の全てを覆い尽くしており、一見したところ何を訴えたのか分らない。

二枚目、三枚目も同じだ。びっしりと血文字が敷き詰まっている。

「それが原書。こちらが写しだ」

由月の手から、数枚の書状を戴く。血文字から墨になったただけで、随分と見やすくなった。

原書と写しを、四人で囲んで見つめる。

「……誤字が有りますね」

文書中の『如』と『月』の文字が誤って書かれている。

「よく気付いた」

由月が誇らしげに笑った。

「そしてこれが、誤字に朱を引かせた写しだ」

由月は先程影亮から受け取った書を、文机に並べた。

「……ご苦労さんだな、亮ねえ……」

書を覗きこんだ影虎が、苦笑いした。

あの疲れた様子からすると、一晩かけて朱を引いていたのかもしれない。もしかすると、写しの作成も影亮がしてくれたのだろうか。

「……お命頂戴致します 破」

修正版に浮かび上がった文字を、須桜が読み上げた。

由月は扇で口元を隠し、肩を揺らして笑う。

「面倒な事をするわりには、面白みが無いだろう？」

だが、と由月は言葉を切って目を伏せた。

「この執念は褒めてやる」

伏せた目も、声も優しげではある。だが含まれる冷やかさに、部屋の温度が下がったような心地がした。

「同じ書状が各地の壱班に届いていた。中央森の各所にも打ちつけられていた。写しではなく、全てが血文字だった。ご苦労な事だ」

影虎が原書を手にして、陽に透かした。

「字のところが所々破れてる。それに掠れてる。針で書いたかな」

「ああ。森の入り口に落ちていた書状には、ご丁寧に血で汚れた針が包まれていたよ。それから、剥がした爪も包まれていた」

須桜が肩を竦め、気持ち悪そうにわきわきと手指を動かした。

「爪は全て親指のもの。十ほど有ったかね」

思わず紫呉は、己の手指をさすった。

「……これは、確かに、……要警戒用件ですね」

「臆したか？」

「まさか」

由月の揶揄の声に、紫呉は反射的に言い返した。由月は満足げに笑う。

「おそらくは、時宜からするに里災の縁筋の者だろう。組頭達を処刑した折に、こうなる可能性は有るだろうとは思っていたが、これほどに求心力が有ったとは以外だった。誤算だな」

由月はこちらを向いて、軽く頭を下げた。

「お前には迷惑をかける。すまない」

「……い？」

紫呉は慌てた。意図せず変な声が出た。

兄が自分に頭を下げるなど、というより、人に頭を下げるなど目を疑う光景だ。

影虎と須桜も同じ気持ちのようで、どうしたものかと顔を見合わせている。

紫呉は無意味にあわあわと泳がせていた手を己の膝頭に落ち着け、由月の顔を覗き込む。

「あの」

何を言おうと決めて口を開いたわけではない。接穂が見つからず、結局は口を引き結んだ。

由月は肩を揺らしている。笑っているようだった。

由月が頭を上げる。閉じた扇で、疑問符を浮かべた紫呉の額を突いた。

「お前は、慌てると途端に幼くなるね」

拍を取るように、ぺしぺしと脳天を軽く叩かれる。

突かれた額を押さえ、紫呉は憮然とした面持ちで視線を背けた。由月は楽しそうに笑い声をあげている。

「そう不細工な顔をするものではないよ。……ああ、そうだ。言い

忘れていたね」

由月は扇を逆の手に持ち替えた。今度は扇ではなく掌で、紫呉の頭をぼんと撫でる。

「おかえり。久しぶりに会えて嬉しく思うよ」
ぱち、と瞬く。

由月は穏やかな笑顔で紫呉の頭を撫でている。

紫呉は首を振って手を振るい落とした。

腹が立つ。面倒ごとを押し付ける為に呼びつけたくせに。

文句の一つ二つ言ってやろうかと思っていたのに。意趣返しの一つ二つしてやろうかと思っていたのに。簡単に絆される自分の純さに腹が立つ。

「……ただいま戻りました」

紫呉は押し殺した低い声で、小さく呟いた。

せめてもの反抗に、自分も嬉しいとは告げずにおいた。

9 楔場

「……暇だ」

己の発した声が、楔場に大きく響いた。こだました声はすぐに消えてしまい、しんと静けさが満ちる。

紫呉は一つ大きく息を吐き、同じくらい大きく息を吸い込んでから、水に潜った。

支曉殿の楔場である。

瑠璃天井ごしに差し込む光を受けて、泉は蒼く澄んでいる。水面だけではない、水中も水底も、全てが蒼く染め上げられていた。

それは瑠璃天井のおかげだけではなく、水底に沈んだ瑠璃の玉のおかげでもある。

紫呉は玉を一粒拾い上げ、浮上した。水面から顔を出すなり、頭を振って水を散らす。

泉の中央に位置する小島に上がり、社の隣に腰を下ろした。拾い上げた粒を社に供える。

これで三つ目だ。紫呉は楔の為にと着替えた白の単の裾を絞り、ついでに袖も絞って水気を切った。

ごく小さな、古びた社だ。奥を覗き込む。何も見えない。祭神の偶像も無く、そこにはただぼっかりとした暗闇が有った。

正式に桔梗の名を継いだ者のみが、倉稻魂とまみえる事を許されていると聞いている。眷属の稲荷はそれ以外の者の前にも時折現れると聞くが、どうやら今日はいないらしい。

まあ、嘘か真かは知れぬ。伝承だ。月の桔梗の話と、同じ水準の話である。

頬に張り付く濡れた髪が鬱陶しい。紫呉は髪をかきあげてから、後ろに両手をついた。

社の隣には木があった。ちょうど己の背と同じ高さくらいだろうか。広葉樹だ。

木には、瑠璃の玉が生っている。時折実が落ちては泉に転がり、ぽちゃんと軽い音を立てていた。

紫呉は足元に転がってきた瑠璃を摘み上げ、ついでに社に供えておいた。

別に、水底の瑠璃を社に供える事が楔の作法というわけではない。単に紫呉が暇つぶしにやっているだけだ。

そもそも、楔に正式な作法も手順も無いのだ。ただ、この場に在る事が楔となる。だがそれではあまりにも暇すぎるので、水底から瑠璃を拾っては供えているのだった。

「ひーまーだ」

もう一度声を発するが、やはり返ってくるのは己の声のこだまのみだ。

折りよく木から落ちた粒が泉に転がり、ぽちゃんと音を立てた。何だか馬鹿にされたようで腹が立った。

紫呉は小島の縁に座り、足をつけた。特に意味も無くぱしりと跳ね上げる。散った雫が波紋を描いた。

それをぼんやりと見おろし、紫呉は何度目になるとも知れぬ溜息をついた。ずるずると足先から滑り落ちるようにして、泉に体を浸す。

仰向けになつて水面に浮かび、瑠璃天井を見上げる。美しかった。だが暇な事には変わらぬ。紫呉は途方に暮れた。

二影は拓也の件を調べてくれている。まあ暇をしていたとしても、ここには如月の血筋の者と、祭事・殿内諸事を司る紫官の長のみしか入れないから、相手をしてくれと望んでも無意味なのだが。

由月は政務にでかけていったし、仮に紫官長が来てくれたとしても、それはそれで気をつかってしまふし困りものだ。

皆、成すべき事をしている。自分が今成すべき事は楔に全力を注ぐ事なのだろうが、その楔が何もせずここに在る事を指すのだから、何をできようはずも無い。

どうせ時間を持て余すのなら素振りでもするかと思つたが、牙月

は応えない。そんな事の為に使うな、と言いたげだ。全く、わがままな奴だ。大人しく従っていれば良いものを。

紫呉は出入口側の地面に上がった。腰を下ろし、泉に足を浸す。濡れた単が気持ち悪い。帯を解く。肌に張り付く衣に難儀しながら、単を脱いだ。

適当に丸めて、ぎゅうと絞る。どうせ自分しかないのだから、下着も脱いでしまっても良いのでは、と思ったところで背後の戸がキィと開いた。

「相も変わらず、汚い体をしているねお前は」

閉じた扇を口元に添え、呆れた顔で由月は言った。

「暇そうじゃないか」

「……多分に暇をしておりますよ」

我ながら、棘のある声だ。

暇だと思っていたし、誰か来てくれないかとも思っていた。

しかしいざこうして来てくれると、何だか自分の思いを見透かされたような気がして、つい楯突くような物言いをしてしまう。

由月は紫呉の隣に腰を下ろした。一応の礼儀だ、紫呉は腕を通さぬままに単を肩にかけ、傷にまみれた体を隠した。

由月が胡坐する。滅多に姿勢を崩さぬ兄が、自分の前では力を抜いていてくれる。

それを嬉しく思うと同時に、何となくその感情を表に出すのも恥ずかしいような気がした。

「兄様を尊敬します」

その所為か、普段以上に平坦な声が出た。

「ほう？」

由月は優雅な仕草で首を傾げた。何を今更、と言いたげだ。

「よくもまあ、祭事の度にこんな暇な事をされていらっしやいますね」

「たまには心を無にして、水にたゆたうのも悪くは無いさ」

由月は微笑んで、撫でるように水面に指を滑らせた。

そういうものなのだろうか。それを解さぬという事は、きっと自分分は未熟なのだろう。

紫呉が絞った単に腕を通した時だ。背後の戸口が、コンと鳴った。誰かが訪れたようだ。立ち上がった紫呉を、由月は咎める目で見ただ。

「その格好で行く気かい」

確かに、人前に出るに相応しい格好ではない。

「まあ、ここに来るのは近しい者ばかりでしょうし」

紫呉が今ここにいる事を知っているのは、近親の者ばかりだ。良い顔はしないにせよ、まあ許してはくれるだろう。わざわざ着替えるのも面倒だ。

紫呉は適当に帯を締めて、戸を開けた。

「っはは、すげえ濡れ鼠」

ひょいと片手を上げた影虎が、思わずといった調子で吹き出した。

「どうしました？」

「や、良いよそこで。床濡れるし」

影虎は、戸の外に出ようとする紫呉を制した。

「ちよつとマジで忍んでくるから。預かつといてくれよ」

言いながら、影虎は左手首の数珠を外した。黒曜石のそれを受け取り、紫呉は影虎を見上げる。

「祭までには帰るよ」

それじゃあ、と踵を返そうとした影虎を、紫呉は呼び止めた。手招きして、こちらに来るよう誘う。

何だと首を傾げる影虎の額に、口づけを落とした指先で如月の紋を描いた。

「月の加護があらん事を」

本来ならば血で紋を描くのが正式な法式だが、これから忍ぶと言っている相手に血のおいをつけるわけにもいかない。

「いつてらっしゃい」

「……祭までには帰るよ」

影虎は額を押さえ、ふ、と笑った。

背を向けた影虎を、今度は呼び止めなかった。

紫呉は戸を閉め、掌の数珠を握る。

黒器を預けていったという事は、危険な場に忍ぶという事だ。

もし命を落とした際、黒器を身につけていると身元が割れやすい。それを防ぐ為だ。

行き先を言わなかったのも、もし死亡した時に紫呉に類が及ぶのを防ぐ為。知らなければ知らぬ存ぜぬ関係ないを、貫く事も可能だから。

家族には行き先を告げているのだろうが、聞く必要は無い。影虎は帰ると言ったのだから。

そしてこの黒器は、帰るといふ彼の決意の証。ならば自分は、それを信じて待つだけである。

紫呉は黒曜石の数珠――清姫を左の手首に嵌めた。パチパチと爆ぜては異を唱える清姫を、逆の手で握りこむ。

「大人しくしている」

清姫が肌を食む。流れた紫呉の血に、嬉しそうに呼応する牙月に腹が立った。

垂れた血を拭う紫呉を横目に、躑のなっていない犬だと由月が笑った。

10 如月

紫呉はぼんやりと己の掌を見つめた。長時間水に浸かっていたおかげで、指先に皺ができ、皮膚は柔らかくふやけている。

支曉殿の紫呉の私室である。露台に面した障子戸は開け放っており、そこから日暮れ時の赤い光が差し込んでいた。

ふいに、さきほどから響いていた篠笛の音がやんだ。

「疲れた……」

部屋の隅の壁に背を預け、笛を奏でていた須桜がぐったりと手足を投げ出す。

「しばらく吹いてないと異様に疲れるわね……。特に腹筋」

須桜は目を瞑り、腹を撫でている。

奉納舞の際、須桜は楽隊に参加する予定だ。普段由月が舞う際には、須桜の母である弥優やゆうが笛を奏でている。本来ならば由月の影である青生が担う役なのだが、青生が嫌だといねた為に代役として弥優が笛役を務めているのだった。

「ん……。……。よし」

頬をパンと叩いて気合を入れた須桜が、笛を構えた。姿勢を正し、すうと大きく息を吸う。

空気を裂くように、高く笛が鳴る。

楽に関しては、紫呉は門外漢である。巧拙は分からぬ。だが、力強い音色だと感じた。

紫呉は傍らに置いていた扇を手にとった。閉じたそれを、ゆつくりと開いていく。

手が攣りそうだ。ひとまずやめにし、手首をぶらぶらと振る。

奉納舞は幼い頃からずっと観ているし、所作はほぼ完璧に覚えている。そこそこには舞える自信があった。

問題は扇の扱いだ。基本の開閉にすら難儀していた。気が重かった。

笛の音が掠れる。須桜は唸りながら、笛を口元から離した。

「どうしました？」

「何か上手くいかない。……ちょっと母さんのところ行ってくるわ」

須桜は立ち上がり、紫呉の部屋を後にした。

徐々に遠ざかる軽やかな足音に耳を傾けつつ、紫呉は開いた扇を掌に打ち付けて閉じた。もう一度、ゆっくりと開いていく。

筋が痛むが、堪えて開いた。須桜は頑張っている。ならば自分だって頑張らねばなるまい。

……とは思うものの、やはり手が攣りそうだ。

口を曲げて、手を揉み解す。いったい何が悪いのだ。

誰かの助力を借りたい。政務が終われば稽古をつけてやると兄が申し出てくれたが、終刻までまだ時間がある。

とりあえずは気分を変えようと、紫呉は露台に出た。

組んだ腕を欄干に預け、夕日に濡れる稜線に目を据える。

赤く映える雲が流れていく。雲々の隙間から零れた光が、風に揺れる木々を照らしていた。

太陽が稜線に沈んでいく。鴉が群れを成して飛んでいく。

太陽が姿を消した。尾根伝いに残照が光っている。一番星が瞬いていた。

遠く見える人家に、ぼつぼつと灯りが点り始める。煮炊きの煙が立ち上っていた。

支曉殿を囲む森に放たれた蝶灯が、灯を纏い始める。黒く夜に塗られた森の中を、ひらひらと羽ばたいていた。

夜の帳はゆるりと下ろされ、風に散った雲間から覗く白月が里を見下ろしていた。

己の祖先が開き築いたこの里は、今なおこうして美しい。

胸にふつつと湧き上がる情動を、人は誇りと呼ぶのかもしれない。

今になって、書状を送りつけてきた破天に怒りが湧いた。

奴らは、この里に背こうと言うのだ。この里を築いた如月に叛こ

うというのだ。

愚かしい。

命を奪ってどうする。その先はいたいどうするつもりだ。如月に取って代わり里を治めようとでも？

馬鹿げている。

紫呉は、足音がこちらに近づいてくるのにふと気がついた。須桜の物ではない。須桜よりもっと体重のある者の音だ。

足音は複数だ。音の持ち主が誰か気付き、紫呉は室内に戻った。拝跪して待つ。

襖が開かれる。

「また書が来ていた。お前も見ろが良い」

体温をまるで感じさせぬ、冷ややかな声音だ。

通りざまに投げ捨てられた書状が、紫呉の眼前にひらりと落ちる。

「虫風情が調子に乗りおって」

自分に向けられていないのに、吐き捨てられた声が重く肩に押し掛かるようだった。

書はまたも血文字で綴られていた。前回のようにまだるい手法で破天の理を唱えている。

「疎ましい。どれだけ喚こうとも虫は虫よ」

「……ご壮健で何よりです」

父上。

欄干に背を預けた父に向き直り、紫呉は頭を垂れた。

父——第十二代おふじに如月桔梗雅由はふんと鼻を鳴らした。相変わらずの仏頂面である。

「お前も無事なようでは何よりだ。手駒は多いに限る」

父は目を伏せ、腕を組んだ。風を受け、袖が翼のようにはためく。短く切った夜色の髪に、鋭く切れ上がった一重瞼。瞳は一見黒に見えるほどの、深く濃い藍色である。

真一文字に結ばれた薄い唇が、仏頂面に磨きをかけていた。

父に似ているとよく言われる紫呉だ。確かに目鼻立ちは父譲りである。若い頃の雅由を見ているようだと、影虎の叔父である影鷹に何度言われただろうか。

だが自分には父のような、滲み出る威圧感はない。そこにいるだけで相手を萎縮させるような、圧倒的な覇は持ち合わせていない。

「あらまあ。もっと素直に心配していたと申し上げれば良いものを」背後から伸びてきたしなやかな指が、紫呉の肩にそっと触れる。

「元気そうですね、紫呉」

「母上も。……………」

続けて何か言おうとしたのだが、相応しい言葉を見つけれず紫呉は口を噤んだ。

隣に座した母――紫は、紫呉の肩を数回叩き、柔らかな表情で微笑んだ。

上品に結い上げた豊かな黒髪。濃紫の瞳は深く澄み、優しげな色を湛えていた。

白い肌には重ねた年月が刻まれているものの、生来の美貌は決して損なわれる事無く、今も母の支配下に有る。

二人とももう五十に手が届くというのに、随分と若々しい。髪には白いものがまじり始めているが、それを補っても余りある若々しさを感させた。

母の言葉に、父は眉根を寄せる。不機嫌な顔がより一層不機嫌に見えた。母は面白がるように、袖口で口を押さえて笑っていた。

「それにしても、本当に手が込んでいる事」

書状を拾い上げ、母が言った。

「くだらん」

父が嘲る。見るのも馬鹿らしいと、深い藍の瞳が雄弁に語っていた。

いつの間にやら背後に来ていた兄が、母の手から書状を抜き取り笑って言った。

「そう仰らず。愚かなりに意匠を凝らして下さったのですから」
隣に並ぶと、やはり由月はよく母に似ている。柔らかで上品な物腰といい、柔らかさの奥に秘めた冷やかさといい、実にそっくりだ。

紫呉は由月に手渡された書状に目を凝らした。

見るうちに、怒りが湧き上がる。

誤字の位置は前回と違うものの、やはり訴えは同じだ。

『お命頂戴致します 破』

実に愚かしい。

父の命も母の命も兄の命も、己の命だってくれてやるつもりなど毛頭無い。

無論、里の命も。

「虫など、潰せば良いだけの事」

「……ほう」

父が唇に笑みを刷いた。そして、く、と喉を鳴らす。俯き、肩を揺らして笑った。

その笑いが伝染したかのように、由月も扇で口元を隠して笑う。

「あら、乱暴ですこと」

呟いた母の台詞は咎めるものだったが、声音はその真逆、紫呉に同意を示していた。

「それが、如月に叛いた報いかと」

紫呉は書状を投げ捨てた。ひらひらと空を舞った書状は、やがてかざりと音を立てて畳に落ちた。

完全な夜を迎えた空に、色づいた月が皓々と輝いていた。

11 祭日

三

眠い。

紫呉は大きく欠伸をした。すれ違った女性に咎める視線をよこされ、少しばかりバツの悪い思いをする。

紫呉は街中に在った。

舞台に続く道には屋台が立ち並び、人で溢れかえっている。あちらこちらの屋台から、絶えず客寄せの声が上がっていた。

屋台からは香ばしい匂いや甘い匂いが漂い、食欲を刺激された。幼い子供が母の手を引き、飴をねだる姿に思わず頬がほころぶ。

活気づいた空気に、自然と心が躍った。昼過ぎまで降っていた雨もやみ、雲間からは青空が覗いている。遠くに暗雲が立ち込めているが、祭が終わるまでは何とかもってくれそうだ。

紫呉はまたも欠伸をした。

こつも眠いのは、祭当日の今日まで昼夜逆転生活を送ってきたからだ。

夜は、政務を終えた由月に舞の稽古をつけてもらっていた。おかげでろくに睡眠できぬまま朝を向かえ、そのまま楔場に向かうはめとなった。

昼間は楔場で、うとうとと過ごしていた。そのおかげで暇を持て余さずに済んだので、まあ、有難いと言えば有難い事ではある。

だがその所為で、昼間眠って夜起きる、という風に癖づいてしまった。昼間の眠気を耐えて眠らず、僅かに得た夜の睡眠時間だけ眠れば良いのだが、それはなかなか難しい。

式班の任や鳥獣隊の任で、不寝番を務める事もある。数日間寝ずにいる事もある。

だがそれは緊張下での事。危険な環境下で気を張り詰めているか

からこそ出来る事だ。危険に晒される心配のない、安穏な状況下で寝ずにいるのは至難の業だった。結局眠気に負け、いけないと思いつつも昼間はぐうぐうと眠りこけてしまった。

それにしても兄には恐れ入る。兄とて睡眠は充分でないだろうに、疲れを見せる事無く政務に精を出しているのだから。睡眠不足という不利を背負って尚、昼間の兄はいつもと同じく完璧に優美で優麗であった。

だが眠気の所為か、稽古をつけてくれていた夜は常よりも意地が悪かったように思う。眠い眠いと言いながらも手を抜くこと無く、厳しく――厳しすぎる程に指南してくれた。……おかげで手首が痛い。何度も扇で叩かれたからだ。

少しばかり腹が立つが、まあ良い。無様な舞を見せるわけにはいかない。何しろ、民は舞手を跡継ぎ様だと思っているのだから。

こみ上げてきた欠伸を、今度は噛み殺した。滲んだ涙を拭い顔を上げると、人ごみの中に知った顔を見つけた。

向こうも紫呉に気がついたようで、明らかに嫌な顔をする。

失敬な、と思うと同時に、ここまであからさまに嫌われると何だか愉快的な気持ちになってくる。

紫呉は精一杯にこやかに笑って手を振った。瞬時に背を向ける彼を追いかけ、逃げられぬようがっしりと手首を掴む。

「ご機嫌麗しゅう、洋殿」

「は、離しなさい！ 私はあるに用などございませんよ！」

「まあ僕だって無いんですけどね」

「ならばお離しなさい！」

洋はぶんぶんと掴まれた腕を振る。しかし力で紫呉に叶うはずもなく、ただの徒労に終わった。

それでも洋は諦めず、何とかして紫呉の手を解こうともがいている。面白い。

「ああもう、さっさとお離しなさい！」

洋は必死になって、手首を掴む紫呉の手を引っ張っている。顔色

が元々悪い所為か、赤黒いというか、赤紫というか、何とも珍妙な顔色になっていた。

これ以上は少し執拗に過ぎるか。紫呉は大人しく洋に従い、手を離れた。代わりに、逃げられぬよう袖を摘む。

洋はぜいぜいと荒い呼吸で、半眼になってこちらを見おろした。

灰緑の瞳には、呆れと諦めの色が浮かんでいる。

「……お離なさい。逃げや致しませんから」

「洋殿は何故ここに？」

「人の話をお聞きなさい。私は版元に給金を頂きに参った帰りですよ。むしろ何故ここにいいのかと問われるのは、あなたの方ではございませんか」

と、いう事は、由月に代わり紫呉が舞手を務める事は洋も知っているのだらう。

洋は袖を摘む紫呉の手をぺいっと払い、ずれた眼鏡を押し上げた。「まあ別にあなたがどこで何をしようと、私には全く関係ないのですがね。そして全くもって興味も無いのですがね」

ならば聞くな。

「ああ、そうです。これをご覧なさい」

洋は懷から読売を一枚取り出し、紫呉の眼前に掲げてみせた。猫背を伸ばし胸を張り、得意げに眼鏡の縁をいじっている。

読売は今日の祭の記事だった。いつものように、如月の情報も掲載されている。

記事曰く、現在如月の長男は病に罹り本調子ではないとの事。だが病を押し、懸命にも舞手を務める、との事。

「感謝なさい。これでいくらあなたが無様な事をしようとも、彼の御仁にご迷惑をかける事にはなりません」

なるほど、一理ある。

舞を観ている者は、今回の舞手が紫呉だという事を知らない。由月だと思っている。いつも完璧に美しい舞を見せる跡継ぎ様が、何かしらの失態を見せたら不自然に思うだらう。

だがこうして先手を打って、病だと報じておけばそれも不自然なことではなくなる。病ならば仕方がない、と思ってくれるだろう。

「感謝するんですね。ですがこの記事に甘えないで下さいよ。失敗しても良いと申し上げているわけではありません」

「もちろんです。僕が完璧に役をこなせば、にいさ、……あとつ、

……、……御仁も、病を押してここまでされるとは、……すばらしい、と、………」

言いさしてちらりと洋を窺えば、洋はやれやれと言いたげに眼鏡の縁をいじりながら首を振っていた。

「あなた」

「はい、すみません。公私を混同し兄と呼ばうとした事も、洋殿が周囲を慮り跡継ぎ様と呼ぶのを控えたのも考慮せずそう呼ばうとした事も、僕が悪いです。すみません」

洋に言われる前に、言われるであろう事を全部述べれば、洋は馬鹿にしきった表情でふんと鼻を鳴らした。

「本当にあなたは迂闊ですねえ。いずれ必ずや痛い目を見ますよ」

「はい、ご忠言ありがたく」

今回の事は自分の失態である。洋の言う通りだ。

洋は胸をそらし、鼻高々にぐだぐだと息巻いている。

自分が悪いのは承知だが、いい加減鬱陶しいと思っていたその時だ。

「あつ！ あーにきー！！ こんなとこで何してるんだぜー！？」

崇の声がして、人ごみの向こうに手ぬぐいを巻いた頭が見えた。

12 饅頭

崇は満面の笑みで人の間を縫い、こちらにやってくる。頭に巻いた手ぬぐい、前掛け、そして襷掛け。いつも悠々館で見ている姿だった。

「兄貴、どうしたんだぜ？　だって今日は」

言いかけて、崇ははっとして自分の口を押さえた。身を寄せ、耳元でこそそそと囁いてくる。

「舞は良いんだぜ？　代わりにするって聞いてただけど……」

「崇、私を無視するのはおやめなさい。聞いているのですか」

「あちらに向かう前に、祭の雰囲気味わいたいと思ひまして。少し我儘を言つて抜けさせてもらつたんですよ」

「うん。兄貴祭の時いつも警備してるし、今日はちょっとくらい羽伸ばしても良いと思ふんだぜ」

「こら、二人とも聞いているのですか！」

洋が少し声を荒げる。ようやく気付いたという素振り、崇はわざとらしく驚くフリをした。

「洋！　いたんだぜ？」

「いますよ！　何なのですかあなたは！　私がお嫌いなのですか！」

「嫌いじゃないけど鬱陶しいんだぜ」

「少しは齒に衣を着せなさい！」

「まあまあ。僕もそう思っていますよ、二人に対して」

「兄貴ひどいんだぜー」

「何なのですかあなたまで！　ま、まあ私はあなたを嫌っておりませんがね！　鬱陶しいとかそれどころではなく！」

洋は大仰に顔を逸らし、勝ち誇つたように眼鏡をいじった。

崇は洋を気にする様子も無く、こそこそと懷をあさっている。

「ほい。兄貴これあげるんだぜ」

「何ですか？　饅頭？」

包み紙を開く。手に乗せられた饅頭はまだ温かく、出来立てのようだった。薄紫色のそれは、どうやら紫陽花を模ったものであるらしい。

「うん。オレン家も屋台出してて。それ、今から屋台に並べる試作品なんだぜ」

食べてみるよう勧められ、紫呉は饅頭を二つに割った。白餡だ。口に運ぶ。上品な甘さが広がった。美味だと素直に告げると、崇は琥珀色の目をきらきらと輝かせた。

「それ、オレが作ったんだぜ」

「へえ……。すごいですね、美味しいですよ。見た目も綺麗ですし」
崇はぱあっと笑顔になって、諸手をあげて喜んだ。

割った片割れを洋に勧める。洋は仕方がないといった体で、饅頭を口に運んだ。もそもそと咀嚼する。

「……まあ、悪くはございませんね」

崇が拗ねたように唇を尖らした。

「洋はそういう所が可愛げ無いんだぜ」

「別に、可愛げなど必要ございませんよ。余計なお世話です」

「あ、そういうこと言っただぜ!？」

「こら、眼鏡を触るのはおやめなさい! 皮脂がつくではありませんせんか!」

ぎゃわぎゃわと二人が言い争う。しばし傍観していた紫呉だったが、だんだんと周囲の人目が気になり始めてきた。人々は遠巻きにこちらを窺っている。

そろそろとめるか、と紫呉は二人の肩に手を置いた。

「うるさいですよ」

ぐっと手に力を込めると、二人はぎゃあと叫んで紫呉の手を払った。

「な、何をなさるのです!」

「うつ……兄貴握力半端ないんだぜ……」

二人は肩を押さえて、涙目になっている。

「野蛮なお方ですね！ 痕ができたらどうしてくれるのです！」

「申し訳ございません。ではお詫びに、一つ良い事を教えて差し上げますよ」

「……何です？」

「蛙のね、目の後ろ辺りに丸いのあるじゃないですか。あれ、蛙の鼓膜なんですよ。鼓膜むき出し」

洋は己の腕を抱え込むようにして、紫呉から身を遠ざけた。鳥肌が立っている。

「兄貴物知りなんだぜ！」

「でしょう。ちなみに蛙は肋骨が無い種がほとんどで、もし異物を飲み込んだ時は胃袋ごと吐き出して洗浄するらしいですね」

「兄貴すっげー！」

洋を窺えば、青ざめて唇をわななかせていた。

「あ……」

「あ？」

「あ、あなた、私が蛙だの蛇だのぬるつとした生き物が苦手と知っていて……！！」

「おや、蛇も苦手でしたか。それは良い事を聞きました」

洋はびくりと肩を跳ね上げた。警戒心をむき出しに、総毛だって紫呉を睨みつけてくる。

「な、何なのですか！ 何故こんな嫌がらせをするのです！」

「いえ、二人が喧嘩しているのを見ていたら鬱陶しいな、と思ったので」

「ならば祟も同罪でしょう！」

「祟には饅頭を貰いましたし」

「餌付けではありませんか！ 何を簡単に餌付けされているのです、安いお方ですね！」

「美味しいは幸せと言うでしょう」

「何ですかその『良い事言っただけ』みたいな顔は！ そういう話ではなかったでしょう！」

「ですが真理です」

「兄貴良い事言った！ 美味しいは真理なんだぜ！」

「何を勝ち誇っているのですか！ まざっていますよ！」

ああもう、と叫びながら洋は眼鏡をしきりにいじっている。

「あなた方と話していると馬鹿を見ます！」

付き合っていられません、と捨て台詞を残し、洋は肩をそびやかして人ごみの向こうへと足早に消えた。

「おや、怒らせてしまいましたね」

「兄貴わざとらしいんだぜー」

呆れるように、茶化するように崇が言う。

「まあとりあえず、饅頭は美味でしたよ」

そう告げれば、崇は照れくさそうに人差指で鼻の下を擦った。

「よし、じゃあ自信持って売り出してくるんだぜ！ 兄貴も舞」

はつと不自然に言葉を飲み込み、崇は口を押さえる。

「兄貴も、舞頑張ってくださいなんだぜ。時間になったらオレも観にいくから」

こそこそと耳打ちして、崇は大きく手を振り屋台へと戻っていった。

さて、屋台をぐるりと一巡したらあちらに向かうとするか。そう思い、紫呉は歩を進めようとした。

その瞬間、腰の辺りにぼすりと衝撃が走った。きゃわ、と小さな悲鳴が上がる。

何事かと振り返ると、七つ八つほどの幼い女の子が鼻を押さえていた。片手に風呂敷包みを抱えている。

「すみません。大丈夫ですか？」

しゃがんで幼子に視線を合わせ、髪を撫でてやる。鼻を赤くした幼子は少しばかり涙を浮かべていたが、差しあたって怪我は無いようだ。ほっと息を吐く。

「うん、大丈夫。こっちこそごめんなさい」

「いいえ。怪我が無くて何よりです」

「あつ、ぺこりと頭を下げた幼子につられるように、紫呉も頭を下げる。」

鼻を摩っていた幼子が、ふいに声を上げた。指差す方向を見れば、雲々の架け橋のような虹が見えた。

「ねえ知ってる？ 虹は龍なんだって。龍と、火なんだって。この前教えてもらったのよ」

得意げに幼子は薄い胸をそらせた。

「月には桔梗のお花が咲いてて、空には龍がいるなんてステキね」
でも、と幼子は言葉を切り、唇を尖らせた。

「お父さんもお母さんも、そんな話は知らないって言うのよ。大人なのね。変なの」

小生意気な事を言う幼子に微笑み、紫呉は宥めるように肩を叩いてやる。

「知らなくても無理はありません。その話は……玻璃の伝承です
から」

幼子はきよとんと目を丸くした。

「玻璃のお話なの？　じゃあどうしてお兄ちゃんは知ってるの？」

「……僕も、教えてもらったんですよ」

へえ、と幼子が頷く。頷いた拍子に腕に抱えた荷物のを思い出したのか、飛び上がるように肩を跳ねさせた。

「おつかい！」

「お気をつけて」

「ありがとう！　じゃあねっ」

幼子は慌しく駆けていく。そんなに走つてはまたぶつかる、と心配に思った。

しゃがんだ際に少し汚れた袴の裾を払い、紫呉は立ち上がった。手庇を作つて空を見上げる。

虹が薄れかかっていく。周囲から残念がる声が上がった。

「……空駆けの、焰」

紫呉の呟きは、群衆のざわめきに飲み込まれて消えた。

13 不在

薄闇が空を覆い始めた。赤く火照っていた雲は宵に抱かれ、色彩を失いつつある。

紫呉は人通りの少ない裏道を通って、舞台の裏手まで歩いた。表の通りには提灯が並び吊るされているが、こちらの裏道には灯の類は一つもなく、喧騒も遠い。

やがて舞台の裏手についた。周囲には沓班や赤官の姿があった。その中に、知った姿を見つける。彼は紫呉を見とめると、気さくに片手をひよいと上げた。

「よう。うちのアホはまだか？」

「という事は、こちらにもまだ帰ってきていないんですね」

「ああ。……何やってんだかな」

と、彼は顎鬚を手のひらで擦った。鮮やかな山吹色の瞳が、不安と焦燥のためか僅かに曇る。

彼の名を草薙^{かげたか}影鷹という。影亮・影虎姉弟の叔父だ。妻帯はしていない。

彼は姉弟の父であり雅由の影であつた影隼^{かげはや}の病没後、姉弟を育てつつ雅由の影も務めている。

紫呉は左手首の影虎の黒器・清姫を逆の手で手首ごと握りこんだ。祭までには帰る、と影虎は言った。だがまだ影虎の姿は見えない。

「……もし、今日帰ってこなければ俺が見に

「帰ってきます」

影鷹の言葉を紫呉は遮る。

「帰る、と影虎は僕に告げました」

影虎は確かに言った。祭までには帰ると言った。

嘘を吐くなど、許さない。

「……ああ。悪い」

影鷹は紫呉の頭を叩くように、軽くぼんと撫でた。

しかし影鷹の瞳には、今も不安が色濃く宿っている。それほどまでに危険な場に影虎は忍んでいるのだろうか。

「もしや、という思いがよぎる。」

「……いつ」

ふいに左の手首に痛みが走り、紫呉は僅かに声を漏らした。清姫がまるで紫呉を責めるように、肌を食んでいた。

「……そうですね」

清姫を撫でて、宥め詫びる。

今し方、影鷹に大きな口を利いたくせに情けない。己が己の影を信じずしてどうするのだ。

「そうだ。自分はただ信じ、待てば良い。」

ふと、よく知る気配が近づいてくるのに気がついて紫呉は顔を上げた。

「おかえりー。ね、屋台どうだった？」

黒色の晴れ衣装に身を包んだ須桜が、こちらに駆け寄ってくる。

片手に篠笛、もう片手に目元のみ狐面を持っていた。

「盛況していましたよ」

「そっか」

清姫がまだ紫呉の元にあるのを目に留め、須桜は少しばかり眦を吊り上げた。唇が小さく「馬鹿」と動く。

だが紫呉を見上げた時には厳しい表情を消し、常の明るい笑みを浮かべていた。

「紫官の皆さんが探してたわよ。着付けしなきゃー、って」

「分かりました。すぐに行きます」

「あっちの方にいるわ」

「はい」

須桜が指差した方角へと紫呉は向かう。背後を窺えば、影鷹と須桜が何か話し込んでいた。おそらくは影虎のことだろう。

しばらくの後に、二人は紫呉の隣に並んだ。

「じゃあ俺は持ち場に戻るよ。ま、安心して舞いな。鷹の目がつい

てるさ」

影鷹は己の目を指差し、茶化すように笑った。

「頼りにしております」

「任せとけ」

ほんと紫呉の肩を叩くなり、影鷹は薄闇に紛れた。ほんの一瞬の間に彼の気配は遠ざかり、すぐに一片も感じられなくなった。

須桜は手にした面を顔にあてがいながら、紫呉を覗き込んだ。

「ね、似合う？」

「おそらくは」

「何よそれー」

「見慣れていないので、何とも言えません」

面を外し、須桜は頬を膨らませた。

「そういう時は、とりあえず似合うって言うておけば良いのよ。紗雪がここにいたらばろくそに怒られてるわよ。女の子の繊細な気持ちを汲み取ってやれない男なんて糞よ糞、みたいな」

「糞は勘弁願いたいですね」

「あと影亮さんにも怒られると思う。女の子に優しくするのは、男が生きていく上での知恵よ、って」

笛を帯に差し、須桜はしたり顔で人差指をぴんと立てる。

紫呉は違和を感じた。

何だか須桜が変だ。いや、変なのはいつもの事だがそれは置いておいて、妙に多弁で妙にはしゃいでいるような気がする。

紫呉は須桜の横顔を窺い見た。笑顔は笑顔なのだが、どこことなくぎこちない。

「もしかして緊張していますか？」

紫呉の言葉に、須桜はぎしりと体を強張らせた。

「いや別にそんな事無いわよ」

早口な台詞とは裏腹に、飴色の瞳がそわそわとあちらこちらに泳ぐ。

その様子を見て、紫呉は人の悪い笑みを僅かに浮かべた。

「……先程も言いましたが、屋台の辺りは中々の盛況ぶりでしたよ。あの人たちが皆舞台の方へ訪れるとなると、まあ、結構な人数になりそうですね」

須桜が足を止めた。見れば、面じみた硬い笑みを浮かべて紫呉を見上げている。

そして、紫呉の顔面を両手でもつちりと挟み込んだ。

「ちょ、手汗気持ち悪いんですけど」

「何なの、何なのよもう。そんなに緊張させて楽しいの。緊張してるあたしがそんなにおかしいの。何なの」

「分かった、分かったから離して下さい」

「むしろ何で紫呉はそんなに普通なの。紫呉だって舞台とか舞とか滅多に出ないししなくせに何でそんなに普通なの」

「ああもう、手汗を塗りたくるな！」

頬をもちもちしてくる濡れた手から、必死で顔を背けようとしたその時だ。

「……何をやっているんだいお前たちは」

由月の呆れた声がして、紫呉はほっと息を吐いた。

14 支度

紫呉は須桜の手首を掴み、手のひらを無理やりに引き剥がした。須桜は抵抗したが、やがて諦めて大人しく手を下ろした。

「ほら、早く来なさい」

ついて来いというように、由月は二人に背を向けた。後を追おうとした紫呉だが、ふいに由月が足を止めたので、ぶつからぬよう慌てて足を止めた。

「須桜」

「はいっ！」

由月の声に、須桜は萎縮してぴんと背を伸ばす。由月は、それはもう楽しそうに笑っていた。

「お前の笛を楽しみにしているよ。せつかくの機会だ、お前は中々の吹き手なのだから、集まった民草にせいぜい聞かせてやりなさい」
笑い交じりの由月の声に、須桜は見るからにぎしりと硬直した。口を固く引き結び、何度もこくこくと頷く。

須桜の強張った頬に冷や汗がツウとつたつたその時、楽隊が彼女に声をかけた。須桜はその声に大仰に肩を跳ねさせた。

一礼し駆けて行くその背を、由月は肩を揺らして眺めている。

「……兄様」

「何だ」

「……いえ。意地の悪いお方だと」

紫呉の皮肉など気にした様子も無く、むしろそれすら楽しいというように、由月は扇子を口元に添えて笑った。

「しかし、須桜も言っていたが何故お前はそんなに普通なんだい。面白くない」

「……まあ、そこそこには緊張しておりますが」

「そこそこか。からかい甲斐の無い」

そう言った由月の横顔は、心底面白くなさそうだった。表情に出ぬ質で良かったとつくづく思う。

本当は、紫呉だって緊張しているのだ。須桜の言う様に普段は舞などせぬし、人前に入る事だって慣れていない。

だのに、失敗は許されない。もし自分が失態を見せれば、それはすなわち由月の失態となる。いくら洋が記事で手助けしてくれているとは言え、それに甘えるわけにもいかない。

それに、破天の手紙の事も有る。いつ、どこで、どのように破天が行動を起こすか予測もつかぬ。

影虎も、まだ帰ってこない。

それら全てを誤魔化すように、須桜をからかって遊んでいたは良いが、今更に悪い事をしたと思う。緊張の余り失敗しなければ良いのだが。

まあ、大丈夫だろう。須桜が自分に、ひいては如月に恥を掻かせる真似など、しようはずも無い。

「ところで兄様」

二人を見とめ、紫官が駆け寄ってくる。

「兄様は、舞の間はどこにいらっしゃるのですか？」

慣れぬ事なので勝手が分からない。紫官は紫呉の体に黒の晴れ衣装を添えて寸法を測っているようだが、どうすれば良いのか分からず慌ててしまう。

「私は影鷹殿たちと共にいる。ほら」

「あ、はい」

袴の紐を解かれ、落ちた袴から足を抜いた。由月は紫呉の黒の単の、胸元の辺りを軽く叩いた。ちょうど、小刀などを収めている辺りだ。

「これは、着替えずいた方が良いか」

「それで良いのでしたら」

「どうせ見えんのだから構わんさ」

代わりに渡された、豪華な刺繍の施された袴を身につける。澪月

に着るには少々分厚い。

単の上からは更に数枚を重ねられた。風通しの悪さに辟易した。他にも足袋やら何やら何から何まで黒の晴れ衣装に整えられ、髪も綺麗に梳られ、全ての着替えが終わった頃には、紫呉は異常にぐったりと疲れていた。

「……改めて、兄様を尊敬します」

「ほう」

紫呉は縁台に腰を下ろし、膝に肘をついて頂垂れた。手扇で風を送る紫呉を見かねたのか、由月が扇子でそよそよと扇いでくれる。

「……敬い尊び礼をつくします」

「言い方を変えたただけだろうに」

隣に座った由月が腕を組む。風がやんだのを少し惜しく思ったが、兄の横顔には冷ややかさが浮かんでいる。もっと扇いでくれなど、到底言い出せる雰囲気では無かった。

「さて、破天はどう出るやら」

そう言った声も冷ややかだった。

裏手に在していた赤官や壱班も、それぞれ配置につくため移動を始めている。

紫呉は懷に手を入れた。すぐに取り出せる位置に小刀が有るのを確認する。指先に触れた慣れた感触に、安堵を誘われた。

由月が懷から小刀を取り出した。鞘を払い、指の腹に刃をあてがう。少しの逡巡の後、由月は刃を指から遠ざけた。

「こちらを向きなさい」

声に従い、体ごと由月に向きなおる。

「汗で流れてしまっただろうから」

苦笑交じりに指先に口づけを落とし、その指で紫呉の額に如月の紋を描く。それもそうだと、紫呉も苦笑した。

「どうかお前に、如月の加護があらん事を」

次いで由月は、小刀で指の腹を裂いた。指に滲む血を舌で拭いつつ、血で濡れた刃先を紫呉の口元にあてがう。

随分と婉曲した加護の施しだ。ついでに言えば物騒でもある。紫呉は間近で鈍く光る刃に視線を落とした。

「無論、私自身も助力は惜しまない。お前に害をなそうという者は、悉く射殺してやろう」

「お言葉、ありがたく」

紫呉は舌を傷つけぬよう注意を払い、刃を濡らす由月の血を舐め取った。ぬるりとした感触と共に、鉄錆の味とにおいが口中に広がる。

「……ですが、兄様のお手を煩わせては爪牙の名折れ。お心だけありがたく」

「……ふん」

由月は鼻で笑い、小刀を鞘に収めた。

「たまには兄ぶってみようと思ったのだがね。まあ良い、そもそもお前の意見を私が聞き入れる必要なぞ無いさ。好きにやらせてもらうよ」

「はい」

不機嫌を装った兄の声音に、ひそやかな苦笑が思わず漏れた。それを見た由月は、扇子でべしりと紫呉の脳天を叩く。そして、痛いと思わせた紫呉に満足そうに笑った。

脳天を撫でる紫呉にひらりと手を振り、由月は立ち去った。影鷹の所へ行くのだろう。

由月の姿が薄闇と一体化した森へと消える。森は湿気た風に揺れ、ざわざわとささめいていた。

紫呉は目を閉じた。瞼裏に訪れる暗闇に意識を集める。

長く息を吸い込み、同じだけ時間をかけて細く息を吐く。数回繰り返せば、緊張が薄らいでいくようだった。そしてその分、集中は高まっていく。

乱髪飾りのついた狐面と、扇子を手に紫官がやってくる。されるがままに整えられながら、紫呉は意識を研ぎ澄ました。

こちらへ、と紫官に導かれる。

15 夜襲

紫呉は下手に在った。

舞台にはすでに楽隊が座していた。張り詰めた空気がこちらまで伝わってくる。

舞台までまっすぐ続く石畳には、両脇に石灯笼が立ち並ぶ。

石畳には人々がひしめいていたが、落ちた暗がりのせいで姿はあやふやだ。ただ真黒い塊がざわめきを生み出しているように見えた。空に落ちた帳は夜。重く垂れ込んだ曇天には、星も月も見あたらない。

湿気こむ空気を風が揺らす。楽隊がそれぞれに楽器を構えた。

途端に人々のざわめきは消え、静けさがぴんと満ちる。在るのは風に揺れる木々の音だけだ。

やがて、高い笛の音がヒィと夜を裂いた。

後方から一つ一つ、石灯笼に灯が点る。石灯笼の中、蝶灯がゆらりゆらりと羽ばたいていた。

ほどなくして灯が舞台まで届いた。鈴がシャンと鳴る。

その音と共に、紫呉は舞台へと摺足を運んだ。身の周囲に蝶灯を纏わせ、両の腕をすうと広げる。

どん、と踵を踏み鳴らせば、笙の音色が天へと立ち昇る。

笛は高く響き、重なった笙竿の音色はどこまでも透き通り音々を包み込む。

太鼓は深く空気を震わせ、数多に集った音の束を鼓が導いた。

逆の指の先に添え扇を開き、円を描くように舞台を摺り歩く。

鈴の音に合わせ扇を持ち替え、ひらりと舞っては踵を鳴らした。

扇を閉じて振り下ろす。閉じた扇は刃に見立てられ、豊穣の邪魔をする災厄を断ち切るという。

扇を広げてくるりと回す。開けた扇は柔風に見立てられ、穀物へ豊穣を呼び込み誘うという。

石灯笼の蝶灯に照らされ、人々の顔が闇にぼんやりと浮かんでいた。

さて、いったいどこに破天は潜んでいるのか。この群衆のどこかに必ず身を隠しているはずだ。

舞台上から目を光らせる。しかしそれらしき気配は掴めない。

ふとその時、紫呉は客の中に異彩を見つけた。

白の単に黒の洋袴。腰には帯の代わりに皮の腰帯が巻かれている。闇の中でも蜜色の髪はひときわ目立った。左の目は伸びた前髪に隠れて見えない。

蝶灯の薄明かりに照らされた白面に、彼は薄く笑みを浮かべていた。

紅緋の眼が、紫呉を捉える。

紫呉に走った動揺を悟ったのか、彼は目をゆるりと伏せた。

紫呉は舞も忘れ、ひたすらに彼の姿を見つめていた。

須桜の笛の音が少しばかり乱れた。紫呉の異変に気付いたのだらう。

群衆にも不審がる声が広がる。波のようにざわざわと声がこちらに押し寄せてくる。

紫呉の視線の先で、彼は笑みを深めた。

それと同時に、爆裂音が鳴り響いた。群衆が悲鳴を上げる。

爆竹だ。屋台の方角から、止む事無く次々と爆ぜる音が続いている。

壱班が警笛を鳴らす。また別の方角で爆竹が爆ぜた。

慌てふためく群衆の中、彼は変わらず腕を組んでこちらを見ている。

そして紫呉は気がついた。彼とはまた別、離れた位置に何の動揺もしていない男がいる。

男は懷から小刀を取りだした。大きく振りかぶる。爆竹は陽動か。小刀がこちらに飛んでくる。避けてはいけない。避けては楽隊に当たってしまう。

紫呉は扇を広げた。扇で小刀を受け止めようとした。

しかし無用だった。小刀は紫呉に届く前に、矢に打ち落とされた。由月が射たのか。

唄班に拘束された男が何かを叫んでいるが、ざわめきに飲まれて声はこちらまで届かない。

舞台に転がる小刀を須桜が拾い上げる。爆竹の音も悲鳴も未だ止まない。

紫呉は舌を打った。視線の先で、彼が笑顔で小さく手を振ったからだ。

歯噛みする。彼の背が、群衆に紛れ消える。

紫呉は舞台の裏手に駆けた。剥ぎ取るようにして面を投げ捨てる。衣装も脱ぎ捨て、彼を追った。呼び止める須桜の声がした。

逃げ惑う人々が邪魔だ。押しのけるようにして彼の姿を探す。

だが見つからない。汗が頬をつたう。この汗は暑さだけの所為ではない。

途端、人々の悲鳴が膨れ上がる。金属的な悲鳴が鼓膜を打った。

視線を巡らせれば、幼子を腕に捕らえた女の姿が見えた。親指に包帯を巻いている。

その幼子には見覚えが有った。先程紫呉にぶつかった、あの子供だ。

幼子の顔は恐怖で引きつっている。女は空いた手を懷に伸ばしたが女の手は懷を漁る事無くだらりと落ちた。銃声と共に、女の腕には紅い穴が開いた。

影鷹が狙撃したのだ。女は叫び、撃たれた腕を押さえる。赤官が女を捕縛した。

呆然としている幼子を、紫呉は抱え上げた。適当な唄班を引きとめ、幼子を預ける。

恐慌する人々を唄班が誘導している。砂埃に視界が霞んだ。

ばやけた視界の隅に、蜜色が映る。蜜の髪がふわりと揺れる。

見紛う事はない。あの眩い金。あれは、彼の髪だ。

彼は紫呉を導くように駆けていく。紫呉はその背を追った。畏だろうとは分かっている。しかし追わずにはいられない。

彼の背は群衆を抜け、街道を抜け、森へと消えた。闇の落ちた森は、しんとひそやかだ。

紫呉は足を止めた。首を巡らせるも、彼の姿は見つからない。

汗を拭う。乱れた呼吸を整える。意識を研ぎ澄ます。

そして、紫呉は嗤った。

「出てこい」

剣呑な気配が自分を取り囲んでいる。

やはり畏か。

数は五。いや、六……七……、まだ在るか。増える足音を数えつつ、紫呉は彼の気配を探る。

だが彼の気配は感じない。巧妙に隠れているのか、それとも既に姿を消したか。

自分を取り囲んだ男女は、皆一様に親指に包帯を巻いていた。親指の爪と共に手紙を送りつけてきた、破天の輩か。

彼らの手にした得物が鈍く光る。その凶暴な光に、紫呉の心臓は昂った。

彼らはじりじりと輪を狭めてくる。ぱきりと小枝が折れる音がした。

「……起きろ牙月」

紫呉は左手首の黒器に手を伸ばした。水晶の数珠を抜き取り、一振りの打刀に変じさせる。

緋鞘のそれを腰に差し、鐔に親指をかけた。柄を握れば、慣れた感触が手のひらに馴染む。

男が声を上げて斬りかかってくる。鯉口を切り、抜き様に斬り伏せた。

「餌の時間だ」

ど、と鈍い音と共に男が倒れる。

頬に男の血が飛んだ。

喜悦に満ちた牙月の咆哮が聞こえた気がした。

16 闇夜

黒色も見えぬ闇の中、鈍く光る銀色の刃に熱が湧き上がった。

心臓が忙しなく脈打っている。血が沸騰しているように体が熱い。牙月を抜けば、紫呉の血は滾る。二尺三寸二分の鋼の直刃に命を預けるこの瞬間、耐えようも無い激流が身を襲う。

それは一種の性的な興奮に似ているようでもあれば、無機的に冷えた煙草の快楽に似ているようでもあった。

刃先から男の血が滴っている。血はぼたりぼたりと落ち、足元の草を揺らしていた。

刃を振って血を払えば、紫呉を取り囲んでいた男女に動揺が走るのを見てとれた。

紫呉が一步踏み出す。それに応えるように、彼らは一斉に斬りかかってきた。

しゃがみ太刀を躲し、斬り上げる。ぐげ、と鳴いた男の喉は、まるで蛙のようだった。

男の口から血が溢れた。ぐるりと白目をむく。紫呉は息絶えた男の腕を取って、ぐいと引つ張った。

傾いだ死体の背に隠れる。と同時に、先程まで紫呉がいた位置を突きが襲った。しかし男の死体が盾となり、紫呉まで刃は届かない。死体に刺さった刃を、男は必死で抜こうとしている。紫呉は死体を蹴り飛ばした。

男は死体の下敷きになる。抜け出そうともがく男を、紫呉は死体もろとも突き刺した。

ぎゃあと叫んだ男の口腔は赤かった。喉奥から溢れた血が、白い歯を赤く染めていく。

紫呉は死体に刺さった牙月に手をかけた。しかし肉が刀身を締め付け、中々抜けないでいる。

そこを後ろから襲われた。突きを避ける。刃が腕を裂いた。

男が上段に構える。振り下ろされた斬撃を避け、紫呉は刀を手にした男の腕を蹴り上げた。

刀は男の手を離れ、宙を舞った。それを受け止め、柄で男の喉を突く。

痛みに呻く男を、返す手で薙いだ。男の手がゆるゆると伸び紫呉を捉えようとするが、手は紫呉に届く前に力無く落ちた。

男はうつ伏せに倒れた。男を蹴り転がし仰向ける。男の目に光は無い。

傷を得た腕に逆の手を伸ばす。指先を傷口に触れさせれば、ぬちやりと肉の感触が絡みついた。

指先を染める己の血をじっと眺める。舐め取れば、生臭い香りが鼻を抜けた。

牙月の刺さった男の死体に足をかけ、牙月を引き抜く。刃を振って血を払った。

腕がじくじくと痛んだ。浅い傷だ。だが痛む。

残った数名は紫呉を取り囲み、じりじりと隙を窺っている。その目には恐怖が映っていた。

「……源の兄弟は、我らの希望だった」

出し抜けに女が口を開いた。声は震えていた。

「この里に炎を、と唱える彼らは美しかった。勇ましかった」

紫呉は、ふんと鼻を鳴らした。

「生きている間に弟君にそう言っただけさしあれば良かったのでは？

気にしてましたよ、ぼくは昼行灯だ、と」

紫呉の言葉に、女は激昂する。

「殺したのはお前たち如月の犬だろう！」

「……」

女の言い分に、紫呉は気がついた事があった。

それは、この一団は紫呉を如月紫呉だと解してはいないという事。紫呉が何者か分かっているのならば、犬などと回りくどく罵らずに

如月の屑め、とでも言ってくれるだろう。

自分は奴を追ってここまでできた。だからこの一団も紫呉が何者か知つての上で、襲撃してきたのだと思つていた。

「……一つ、聞きたい事があります」

「お前に教える事など何も無い」

「あの金髪の男が何者かは、あなた達は知っているのですか？」

「……何？」

女は訝しげに眉根を寄せた。

「ここまで僕を誘導してきた男がいる。その男だ」

「……我らの、同志だ」

「同志、ね」

何故そんな事を聞くとでも言いたげに、女は不思議そうな顔をしている。

「奴が入天したのはいつです？」

紫呉は女のもとへ足を運ぼうとした。だが足首を掴まれ、その場に縫いとめられる。

「今だ！」

最初に斬り伏せた男だった。まだ息が有ったのか。舌を打って、男の腕に刃を立てる。

男が悲鳴を上げたのと、女が紫呉のすぐ側までやってきたのがほぼ同時だった。

女は手にしていた棍を振りかぶる。足首に絡んだ男の手は、今もしつこく紫呉を捉えている。

女の棍が紫呉の側頭部を打った。瞼裏に光が散って、均衡を取れず体がぐらりと傾いだ。

気がつけばすぐ眼前に地面があった。強かに顔を打ちつける。

腐葉を食み、黴た苦味が舌を侵した。ぬるつく顔面は鼻血の所為か。

こめかみから垂れた血が目に入る。視界がぼやけた。

腕で頭部を覆い、女の打撃から身を守る。棍は皮膚を裂き、骨に

響いた。

女は紫呉が握る牙月に目を留め、紫呉の腕を踏みつけた。籠った呻きが喉から漏れる。

紫呉の手から離れた牙月を、女は蹴り飛ばした。途端に心許なく思っ自分が無様だ。

女は執拗に紫呉を打つ。痛みが広がる。だが徐々に眩暈は薄れつつある。

足首を縛っていた男の手指がするりとほどけた。どうやら男は息絶えたようだ。

紫呉は頭部を守る腕の隙間から、女を窺い見た。女は実に愉しそうな目をしていた。

紫呉は一瞬の隙をつき、身を起こした。女を突き飛ばし、牙月を拾い上げる。

足がふらつく。まだ脳は揺れているようだ。情けない。

自分を追ってくる男たちから、紫呉は素早く距離を取った。

離れた位置の樹に背を預け、ずるりとしゃがみ込む。紫呉の来た道には血痕が残っていた。

「……くそ」

袖を裂き、傷ついた側頭部を覆ってぐると巻きつけた。吐き出した唾液には血と砂が混ざっていた。

阿呆か。戦闘の最中によそ事を考えるなど、阿呆に他ならない。息を吐こうとして、紫呉は咽た。鼻血が喉に流れてきたのだった。男たちがこちらにやってくる。構わない。距離を取ったのは隠れる為ではなく、手当てをする為だ。

打たれた頭が痛む。腕も痛む。咳き込みながら、紫呉は牙月の柄をしっかと握った。

汚れた顔を肩口で拭う。痛みと血のにおいに、はしたなく本能がむき出しになる。

足音が近づく。何人だ。いや、何人だろうと構わない。

来い。殺してやる。全員だ。撒き餌なら僕の血で充分だろう。

さあ来い。

喰らいつけ。

「それで隠れたつもりか？」

すぐ背後で、足音が止まった。

男が樹に手をかけ、紫呉を覗き込んでいた。男の瞳は残忍な愉悦と、加虐的な歡喜に満ちていた。

男は笑って、太刀を振り上げた。

こめかみから垂れてきた血が唇を濡らす。舌で拭う。牙月は悦んでいる。

男が太刀を振り下ろす。だが牙月が男の喉を裂く方が疾かった。

男の喉から血が噴き出す一瞬前、皮膚がめくれて白い肉が見えた。まさに純白と言うにふさわしい白だった。

男はきょとんとした顔で喉を押さえている。男の指は震えていた。唇はわなないていた。

男の指の間から血はとめどなく溢れ、男の手も腕も肩も赤く染めていく。血を吸った単が重たそうだった。

やがて光を失った男の目に、紫呉の姿が映りこんでいた。

紫呉の真黒い瞳は残忍な愉悦と、加虐的な歡喜に満ちていた。

17 静寂

どさ、と音を立てて男は倒れ伏した。男の指先が痙攣している。

男の胸を突く。動かない。死んでいる。死んでいるならそれで良い。

むせ返るほどの血潮のおいだ。生臭く鉄臭く、芳しくも厭わしい。

ひいひいと震える呼吸音が鼓膜を揺らす。音の先には女の姿が在った。

紫呉の網膜が女の姿を捉えた。先程執拗に紫呉を打った女だった。頬の筋肉が動くのを感じた。どうやら自分は笑ったらしい。

女は息を呑み後ずさる。見るからに女は怯えていた。

女の足は震え役を成さず、女は尻餅をついた。棍を股の間に挟み、ずるずると後ずさる。

先程まで愉しげに自分を打っていた女が、今は無様に震え、今にも漏らさんばかりに怯えている。

愉快だった。

一歩ずつゆつくりと、女との距離を詰める。

女はゆるゆると首を振り、意味を成さぬ音を口から発している。

口の縁に唾液が張り付き、汚らしかった。

棍は濡れていた。血だ。紫呉の血だった。

あの棍が己の身を打ったのだ。あの女が、あの女の腕が己を打ったのだ。そう思えば、余計に側頭部の傷がじくじくと痛みを訴えるようだった。

胸に湧くこの感情は、きつと怒りだ。もしかしたら喜びなのかもしれない。分からない。何でも良い。

女は己を打った。打ち、殺そうとした。この先も己に害を成すかもしれない。成さないかもしれない。

だが何だって良い。邪魔だ。それに傷が痛む。この傷を与えたのはこの女だ。ならば排除するしかあるまい。

「た、たす

女の声を遮り、紫呉は女の眉間に切っ先を突き立てた。女の目が、己の眉間を確認するようにぐりと上向く。

刃を抜く。首が上方に傾ぎ、遅れて体が倒れた。地に伏す前、女の頭が樹の幹にぶつかり、ごつんと音を立てた。

女が手にしていた棍が転がる。だが女の手はそれを追おうとしな

い。絶命しているようだった。

これで良い。これで、女はもう自分に刃を向けられない。

木の葉を踏む音がした。振り返れば、男が二人いた。

首を巡らす。二人以外に姿は無い。

二人の男は震えながら、紫呉をじっと見ている。荒い呼吸が耳障りだった。

男たちは互いに目を合わせ、それを合図に紫呉に斬りかかってき

た。

喉が震えるのを感じた。やはり自分は笑ったらしい。

大きく踏み込む。もう脳は揺れていない。足取りもしっかりしたものだ。

横薙ぎの刃を跳んで躲す。大きく振りかぶり、叩きつけるように男の体を裂いた。

刃は男の眉間を通り、腹を通り、股間を抜けた。丁度男の体を二分にするように刃傷は走り、追って血が噴き出した。

男が倒れる。着地と同時に、横様から突きに襲われた。身を逸らし、そのままの勢いで地に手のひらをついた。

後転する流れに任せ、足の甲で男の腕を蹴り上げる。手から離れ落ちた刀を取ろうと、男は慌てて膝をつき手を伸ばす。

紫呉は素早く体勢を整え、柄を取った男の手を踏んだ。男がこちらを見上げる。昏い目をしていた。白目が充血していた。

男の首元へ牙月を振り下ろす。血が噴き出す。

悲鳴が臓腑を撫で上げていく。

ぞくりと背が震えた。

牙月が鳴いている。悦び、打ち震えている。

男の体が強張り、やがて力無く地に伏せた。紫呉は踏んでいた男の手から、足を退けた。

男の指先で、虫が死んでいた。紫呉の足に圧され、潰されたのだった。

一転、夜の森には静寂が落ちた。生ぬるく湿った風が、汗ばんだ肌を撫でていく。

呼吸音に首を巡らせる。だが屍以外に誰の姿も見つからず、自分の喉が立てている音だと気がついた。

そう知った途端、喉がヒュウと音を立てた。唾液だか血だか知れぬが、何かが喉に引っかかり派手に咳きこむ。

ひとしきり咽せ、口元を拭う。だが己の手の甲に付着した血が、口元をべったり汚したただだった。

大きく吸い込んだ空気と共に、理性が忍び込んでくる。生臭く湿気た空気に、鼻の奥がツンと痛んだ。

辺りを見渡せば、屍の群れだ。握った牙月の切っ先から血が滴り、ぱた、と音を立てた。

胸がざわめいた。

だがこの情動を、後悔と呼ぶにはおこがましいような気がした。

ひふみ、と視線で屍の数を数える。数え終えた直後に、血で濡れた袂の重さを自覚した。

ぎゅうと絞る。もう片方も絞ろうとして、右の手に牙月を持ったままだった事に気がついた。

戻れと念じるが、牙月は言う事を聞こうとしない。嘆息して、左の手指を柄と手のひらの隙間に潜らせようとする。

だが、紫呉の手はぎつちりと柄を掴み離れない。

もう誰もいないと分かっている。追っていたあいつの気配だって感じない。なのに体は言う事をきかない。

屍が己を見ている。

紫呉は目を眇めた。

(……背けるな)

目を背けるな。

面を上げる。

背負うと決めたんだろう。

生き抜くと決めたんだろう。

奥歯を噛みしめ、屍の濁った眼球を見つめ返す。

屍の目が、己に語りかけてくる。

『どうだ、満足か』

『我らの肉の感触は悦かったか』

紫呉は肩口で汚れた顔を拭った。だが着物はどこもかしこも血で汚れ、結局着物の血が顔に付着しただけだった。

女に打たれた側頭部を始め、傷口が痛みを訴えている。体中が痛んだ。

戦うと、そう決めたのは自分だ。だから、傷を負う事は恐くない。怖いけれども恐くない。

紫呉は手の牙月を見た。右の手は、まだ意志に反して開かない。牙月はまるで紫呉の手の一部のように、ぴたりと手のひらにくっついて離れない。

牙月は刃も鏑も柄も血にまみれ、ぬらぬらと光っていた。だが牙月はまだ足りぬとでも言うように、震えて吠える。

仰向けば曇天が見えた。重く垂れ込んだ空は、いつもよりも近くに在るように感じた。

痛みは恐くない。

恐いのは、悦楽に吞まれる自分だ。

女の肉を断って、男の骨を断って、背筋に震えが走った。

あの震えは恐怖じゃない。嫌悪でもない。

快感だ。

紫呉は息を吐いた。

月は見えない。だが見えぬだけで、雲の向こうでは皓々と照っているのだろ。相も変わらず、桔梗も美しく咲いているのだろ。きつと葉は瑞々しく生氣に溢れ、茎はぴんと真直ぐに伸び、花弁は堂々と咲き誇っているに違いない。

柄を握る右の手指を、逆の手で離させようとする。

ぱき、と小さな音がした。左手の爪が割れた音だった。

そう。帰ったら、須桜にこの爪を治してもらおう。爪が割れていると、着物やら何やらに引っかかって何かと不便だ。

それに割れた爪で黒豆を撫でるとなると、毛が爪に絡んで痛い思いをさせてしまうかもしれない。となると、しばらく寄ってきてくれなくなってしまう。

腹も空いた。何か温かいものが食べたい。うどんとか蕎麦とかの類が良い。影虎に言えば、きつとすぐに作ってくれる。

そういえば、今日は雪斗は来ていたのだろうか。傀儡舞の参考に、と毎回祭には来ているから、きつと今日も来ていただろう。

紗雪はどうだろう。来ていたならば、雪斗と一緒に来ていたのだろうか。二人とも、騒ぎに巻きこまれずにいてくれたら良いのだが。舞を見に行く、と崇は言っていたが姿を見かけなかった。屋台が忙しかったのだろうか。いや、単に自分が見つけられずにいただけかもしれない。

洋は、今日の事をどう記事にするのだろうか。次に会った時に、またぐだぐだと嫌味を言われるに違いない。まあ、仕方が無い。

莉功は今頃、事後処理に追われているだろう。影鷹が狙撃したあの女あたりに、尋問している最中かもしれない。

己の姿を見たら、青生は傷の手当をしたがるに違いない。影亮はきつと、呆れた顔で心配してくれる。

ほんとあんた何者なの何やってる人なの、と浅葱は訝しげな顔をするだろう。次に、まあ金払うなら何でも良いけど、とでも言いそう。

帰ったら、由月は何と言うだろう。汚い姿だね、と少し困ったよ

うな顔で、優しく笑ってくれるだろうか。

父と母は、何と言うだろうか。兎にも角にも、二人ともまずは溜息をつくだろう。その次の言葉は予想がつかなかった。

じんわりと手指の力が緩む。小指から順に指を開かせ、牙月を逆の手に移す。紫呉は、右の手を何度か握ったり開いたりを繰り返した。

手指が己の意志で動くことに、安堵を感じた。まだ強張っているものの、何とか動きはする。

右の手のひらには、くつきりと爪の痕が残っていた。その爪の、爪と肉の間には血が流れ込み、固まりかけていた。

紫呉は牙月を利き手に持ち直し、振り下ろして刀身の血を払った。戻れと命じようとしたその時だ、背後でかざりと葉を踏む音がした。

数間先の樹の影に身を寄せて、こちらを見つめる女がいた。

彼の女は、吉村楓だった。

18 邂逅

楓は、その場にずりりとしやがみこんだ。

何故ここに、と不思議に思いはしたものの、無事でいたか、と安堵の気持ち湧き上がる。

楓の側に向かおうと、足をそちらに向けた時だ。

「……どうして」

楓は呟き、辺りを見回した。そして口元を押さえる。嘔気を必死で堪えているようだった。

「……何で」

言いさして、楓は背を丸めて吐瀉した。樹の幹に手をつき、苦しそうに吐いている。

紫呉は足を止めた。幹に手をついた彼女の親指には、屍と同じように包帯が巻かれている。

胃の中のものを全て吐きつくし、楓は紫呉を見上げた。大きな目には確かな怒りが見えた。

「……何で、殺したの」

震える声で呻き、楓は周囲を見回した。

「三吉さんと、舞さん、すぐく幸せそうだったよ。二人目が生まれただ、って、……すぐく……」

楓の声が涙に飲まれる。

さて、どれが三吉さんと舞さんだろうかと、紫呉は屍に視線を走らせた。見たところで分かるわけも無いのだが。

「……彼らは僕に刃を向けた。だから斬った。それだけです」

先程までの激情は嘘のように凪ぎ、静穏と言って良いほどだ。平坦な己の声を聞きながら、紫呉は何だか不思議な心地を抱いた。

「それだけ？ 何よその言い方、何で、何で……っ！」

「では殺されて差し上げれば良かったんですか？ 真っ平御免だ」

「うるさい、うるさいうるさい！ そうよ、死んじゃえば良かった

のに！ 何で、何で拓也を殺したの！」

乱雑に言葉を紡ぎ、楓は拳を何度も幹に叩きつけた。

「拓也を返してよ！ 返してよ……っ！」

楓は顔を両手で覆い、咽び泣いた。悲痛な泣き声が夜の静寂を打つ。

「……瀬川拓也の一件は、僕の与り知らぬ事です。彼を殺したのは僕じゃない」

「嘘！」

弾かれるように顔をあげ、楓が叫ぶ。

「そんな都合の良い話、信じれるわけじゃない！ だって私は見たもの！ あなたの側で死んでる拓也を、私は、見たもの……っ！！ 拓也もあなたが殺したんでしょう？ こうやって、ものを斬るみたいに拓也を斬ったんでしょう？」

大きく睜った目からぼろぼろと涙を零し、楓は早口に言った。殺してやる、と低い声で彼女は呻く。

取り出した小刀の鞘を払い、楓は立ち上がった。

「ねえどうして？ 何でこんなに簡単に人を殺せるのよ。何でよ。

何で、なのに、何であなたは普通に暮してるのよ。治安維持部隊の肩書きが免罪符になつてるとでも思ってるの？ ねえ答えなさいよ「生き抜くと決めたんだ」

楓が言い終わるのを待たず、紫呉は言った。

ぼつりと、雨が地面を打つ。

忙しなく上下する楓の肩を濡らす雨粒を見やりながら、ようやく降りだしたかと、紫呉はそんな事を考えていた。

「報いは必ずや受けましょう。いずれ、彼岸にて」

「……っ」

「だが」

楓が何かを言おうとするのを遮る。

「今生は、生き抜くと決めた。奪った命を背負い、生き抜くと決めたんだ。その重みに押し潰され、地べたを這い蹲る事になろうとも

それでも」

紫呉はぶら下げていた牙月の切っ先を、楓に向けた。

「生き抜く覚悟は、とうに出来てる」

雨粒が直刃の上で弾け、細かな飛沫を散らす。

小刀を握る楓の拳に力が籠る。親指に巻かれた包帯に、じわりと血が滲むのが見えた。

俯いた彼女の頬に、濡れた髪が張り付いている。

「あなたを殺したいから、入天したんだもの」

楓は顔をあげ、こちらに一步踏み出す。

彼女は笑みを浮かべていた。凄艶と言って良いほどの、美しい笑みだった。

「嘘の手紙まで書いて、家族も友達も置いてきて、それでも私はここにいるんだもの。あなたが仇じゃなきゃ、私、困っちゃう」

幼い物言いで、楓はくすくすと小さな笑い声を漏らした。頼りない足取りで、楓はこちらに向かってくる。

ふと、紫呉は動きを止めた。

気配を感じる。

視線が突き刺さる。

ちりちりと焼けつくような視線が、背中を焦がしている。

視線の出所を探る。

意識を研ぎ澄ます。

どこだ、

どこにいる。

この気配、

この空気、

この視線。

これは、あの男のものだ。

紫呉は背後を振り仰いだ。

彼は、そこにいた。

樹の上にしゃがみ、膝に両肘をつき、面を思わせる無機的な笑みで紫呉を見おろしている。

彼は紫呉が気付いた事に対してか、少しだけ眉をあげて、驚いたような表情を浮かべてみせた。

彼の蜜色の髪は雨に濡れ、普段よりも僅かばかり濃度を増している。

だが瞳の色は変わらぬ。雨に濡れようと、血に濡れようと、あの色は決して変わりはない。

そうだ。例えるならば、炎の赤より尚も紅い、紅緋の焰だ。

あの目はいつだって同じように、疎ましく燃える火中に在る。

紫呉は彼の名を呼ぼうとした。

だが出来なかった。

腰に、痛みを感じたからだ。

いや、痛みというよりも、ただ熱かった。燃える鉄板を差し入れられたのかとさえ思った。

強張る首を何とか動かし、背後を見やる。

楓がいた。薄く笑みを浮かべていた。

楓は紫呉の腰から刃を抜いた。

（抜いた？）

楓の手の中に、赤く濡れた小刀が有る。楓はいつぱいに目を見開き、手の中の小刀をじっと見つめていた。

そうか、刺されたのか。

刺したのか、

この女が、

この
女の
が

紫呉は牙月を振りかぶった。

雨足は激しさを増してきている。

19 哭雨

一太刀に斬り伏せる。

絶命のその瞬間まで、楓は薄い笑みを浮かべたままだった。

楓の身体は仰向けに倒れた。ぬかるんだ地面は泥を跳ねさせ、紫呉の顔にまで泥が跳ぶ。

肩で息をしながら、紫呉は腰の傷口に手を伸ばした。

指が傷口にめり込む。血はとめどなく溢れ出している。

嫌な傷だ。

嫌な、傷だ。

血は雨と混ざり合い、脚を伝い落ちていく。それに伴い、だんだんと体温が低下していくのを感じた。

冷えた体は無様に震え、歯の根が合わずにがちがちと音をたてる。ただ傷口ばかりが、燃えるように熱い。

傷口の熱は次第に痛みに変わり、全身を痺れさせていく。体が傾ぐ。だが必死で脚に力を込め、何とか体を支えた。

ぱん、ぱん、と手を打ち合わせる音が頭上から聞こえた。

「女の子相手に容赦無いね」

彼はにこやかに笑み、地面に降りた。泥が跳ね、彼の身につけた白の単も、黒の洋袴も茶色く染める。

しかし彼は全く頓着した様子を見せずに、左手首から瑠璃の数珠を外した。

紫呉は傾いだ体を、牙月を地面に立てて支えた。

脚が震えている。手も、腕もだ。血が足りず、体には力が入らない。

だが倒れてなるものか。

この男の前で、膝をついてなるものか。

激しく肩を上下させながら、紫呉は彼を睨めつけた。

「……変わらないね、その目」

彼は笑みを深めた。

そして黒器の名を呼ぶ。

鼓膜までもがイかれてきているのか、声が遠い。

しかし自分は知っている。あの黒器の名を。

『向陽』と、奴は、そう呼んだのだ。

瑠璃の数珠は、藍鞘の打刀に姿を変えた。

藍鞘から加羅が刃を走らせる。暗闇の中、冴え冴えと青白く刃が光る。

知っている。

この乱刃が、どれほどの斬れ味を誇るのか。

そうだ、この刃が己の身を裂いた。

この刃が、翔太の首を裂いたのだ。

加羅が地面を蹴る。

紫呉は牙月を地面から引き抜き、吼えた。意味を成さぬ、ひび割れた咆哮だった。

刃を横にして、加羅の斬撃を受け止める。しかし体には思うように力を込められず、情けなくも吹き飛ばされた。

何度か地面を跳ね、ようやく勢いが止む。手に、脚に力を込めるが立ち上がれない。紫呉は俯けに泥濘に伏せた。

意識が遠ざかる。加羅が跳ね上げる泥の音すら、遠くに聞こえる。

畜生。

何故、この体は思うように動かない。

何故、己の意識も繋ぎ止められない。

この世界で一番憎い相手が、今、目の前にいるというのに。

立て。

立て！

立ち上がれ！

「……あ」

雄叫びを上げたつもりの喉は掠れた小さな音を発するだけで、ぞつとするほど虚しく響いた。

牙月を握った手を踏みつけられた。加羅の汚れた洋靴を、霞んだ目が映し出した。

どうしようもなく体が重い。指先一つ動かせない。雨粒の冷たさすら感じない。

ざあざあとうるさいこの音は、雨音なのか、それとも、からだから流れおちる血しおがたてるおとなのか、それすらも、わからなかった。

「その足を除ける！」

ひゅ、と風を切る音と共に石礫が二人の間を裂いた。加羅は跳んで、数歩下がる。

「これはこれは。お早いお着きだ」

「黙れ！」

須桜は駆け寄り、勢いそのままに棍を打ち付けた。しかし加羅は動じる素振りも無く、須桜の打撃を軽くないです。

紫呉を背後に庇い、須桜は第二撃を繰りだそうとした。だが、雨でぬかるんだ地面に足を取られ、僅かに均衡を崩す。

それを、加羅は見逃さなかった。片膝をついた須桜の元に、加羅は機敏な動作で距離を詰める。

首元に振り下ろされた打刀を棍で受けた。ぶつかり合った得物が鳴らす音が、ひどく耳障りだった。

加羅が笑った。と思うなり彼は刃を退け、洋靴の爪先で泥濘を跳ね上げる。

泥に視界を奪われ、須桜は怯んだ。口に入った泥を吐き出す。立ち上がるうとする須桜を押さえつけるように、加羅は上段から向陽を振り下ろした。

棍を横にし、受け止める。が、力でも技術でも自分はこの男に劣っている。すぐに腕は震え、悲鳴をあげだした。

それでも、退くわけにはいかない。主を護れずして、何の為の影だ。

あの時、舞台から駆け出した紫呉を、須桜はすぐさま追った。だが只でさえ紫呉は足が速い。それにあの人がみだ。須桜は紫呉の姿を見失った。

方々を探し回り、やっと見つけた時にはこれだ。

須桜はちらりと背後の紫呉を窺った。意識は有るのか無いのか、うつぶせた彼からは読み取れない。

いや、もしかしたらもう死んでいるのか？

まさか！

紫呉が死ぬなど、死ぬわけなど、そんな馬鹿な話があるものか！大丈夫、大丈夫だ。僅かだが紫呉の背は呼吸に合わせ上下している。大丈夫だ。

だが早く治療をしてやらないと。傷が痛そうだ。痛そうだ。痛いのは可哀そうだ。早く治さなければ。早く、早く。

歯を食いしばり、渾身の力で加羅の刃を跳ね除けた。立ち上がる。だが須桜が体勢を整えるよりも先に、加羅が紫呉の元へ駆ける方が速かった。己の横を過ぎようとする加羅を、視界の端に捉える。

須桜は咄嗟に二人の間に飛び込んだ。

背を、ばさりと斬られる。

その衝撃と痛みに崩れそうになるが、ぶんと紅雲を振り回して加羅を遠ざけさせる。

加羅が下がった。

須桜は腕を真直ぐに伸ばし、紅雲の先で加羅の頭部を指し示す。

「動くな」

こちらに駆けようとしていた加羅の足が、須桜の声にぴたりと止まる。

須桜は両膝をついた。本当は何としても立っていたかったのだ

が、体が言う事を聞かない。

それでも、震える腕で必死に紅雲を支えた。棍の先は震えながらも、加羅からぶれる事は無い。

「そこを動くな。指一本も動かすんじゃない」

棍を持つ手とは逆の手、背から流れ出した血が腕を伝い、指先から雫がぽたりと紫呉の上に落ちる。これ幸いと、須桜はひたすらに治れと念じた。

「もしも動けば」

息が荒い。声が震える。痛みに意識を持っていかれそうになる。

「もろとも吹き飛ばしてやる」

だがそれでも声を振り絞った。

須桜は血の伝う腕を振り、己の血を周囲に散らした。

言外に立ち去れと意味を込め睨み据えるも、加羅は感情の見えぬ顔で、こちらをじっと見つめるばかりだ。

痛い。

寒い。

視界が霞む。

呼吸すらも困難だ。

頼むからさっさとどこかへ行ってくれ。お願いだ、頼む。

ついに棍を支える力も痛みに奪われた。棍を地面に立て、それに縋るようにして体を支える。

意識が遠ざかっていく。

だのに何故この男は動こうとしない。立ち去ろうとしない。いつそ泣き出したい気分だ、畜生め！

20 帰還

意識はまだ有る。

呼吸もしている。

心臓も動いている。

自分はまだ生きている。

だが、生きているだけだ。

それでは意味が無い。護れなくては、生きているだけでは、何の意味も有りはしない。

加羅を睨む。睨みながら、紫呉を想う。

傷はどれほど塞がった。血はまだ流れているか。

治れ、治れ、治れ。早く、早く治ってくれ。

びちゃ、と加羅が爪先で地面を叩くのが見えた。向陽を一振りして須桜の血を払い、構え直す。その一連の動作が、やけにゆっくり目に映った。

須桜はぐつと脚に力を込めた。歯を食いしばり、がくがくと震える脚に力を込めて立ち上がる。それに伴い、背中から血が溢れだした。

睨み据えて、息を吸う。ヒュウと喉が音を立てる。

失せろ、と叫んだつもりだった。だが実際に喉から零れたのは、ただの呻き声だった。

ふ、と視界が黒く染まる。

駄目だ。

今、意識を手離してはいけない。

そう願うのに、須桜の意識は黒く塗りつぶされていく。

加羅が何か言った。みあげたこんじょうだよみかけ。多分、そう言った。

須桜の後方、雨音にまじり、がさりと木々が揺れる音がした。次いで、ぬかるみを跳ね上げる足音も。

意識が真黒に染まる一瞬手前、須桜の網膜は人影を捉えた。それが誰なのか認識すると同時、須桜は繋ぎとめていた意識を手離した。「何でてめえがここにいやがる」

影虎は右の手で長針を放ち、左の腕にはがくりと崩れた須桜を抱えた。

「きみこそ、どうして今までここにいなかったのかな」

軽い身のこなしで針を避け、加羅は何もかもを見透かしたような目で笑う。

影虎は鋭く舌を打って、須桜を肩に担ぎ上げた。逆の腕には、伏した紫呉の腹に手を回して、ぶらさげるようにして抱え上げる。

「早くしないと二人とも死ぬよ？」

「うるせえ。てめえに言われるまでもねえよ」

言い終わらぬうちに、影虎は駆け出した。後ろを振り返る事無く、ただひたすらに夜闇を駆ける。雨粒が頬を打ち、痛い程だった。

影虎が戻ってきた時には、舞台の周囲はすでに騒動に飲み込まれていた。状況把握に努める影虎の元に駆け寄ってきたのは、崇だった。

紫呉の後を鳩に追わせた。追わせた鳩を、他の鳩に追わせている。それを追えば紫呉は見つかるはずだ。崇は状況を知らせると共に、落ち着いた声でそう言った。

その鳩を頼りにここまで来たら、この惨状である。影虎の胸は焦燥と恐怖で焼け焦げそうだった。

担ぎ上げた須桜の体から熱い血がどろりと流れ出し、影虎の肩を濡らす。もう意識は無いだろうのに、彼女は時折治れ治れとうわごとを発する。

抱えた紫呉にいたっては、指先一つも動かそうとしない。だらんと垂れた腕が揺れて、指先が折節当たる。その力無い動きがより一層影虎の焦燥に拍車をかけた。

早くしないと二人とも死ぬよ。加羅の笑い声が耳に蘇った。

「……くそ……っ」

そんな事は分かっている。分かりすぎている。

だが死なせてたまるか。失ってたまるか。半身も、主も、決して死なせはしない。己はまだ月に繋がれていたい。

影虎はただ必死に脚を交互に動かした。裏道を選び、支曉殿をひた目指す。枝に皮膚を搔かれようと、二人の重みに体が軋もうとも、止まるわけにはいかない。止まるつもりなど無い。

背を追う気配は無い。ありがたく思うがしかし、訝しくも思う。圧倒的有利に立っているだろうのに、何故加羅は追ってこない。

だが考えるのは後だ。今は逃げ切るのが先決である。忍んだ先得た毒に、この体が侵されきるその前に。

瞬く間に夜に消える影虎の背を視線で追い、加羅は首を振って頬に張り付く髪を散らした。ぬかるむ地面を踏み歩んだ先は、楓の元だ。

楓の腹は無残に裂かれていた。傷口はお世辞にも綺麗と言えず、ぎざぎざと歪である。力に任せて刀を振り下ろしたからだろう。

紫呉らしいと言えば、実に紫呉らしかった。いや、彼の太刀筋はどんなものであると、彼らしいと言えるのだが。するりと撫でるように軽やかに皮膚を裂く太刀筋も、力に任せて骨ごと叩き斬る太刀筋も、どれも彼らしい。いつだって彼の太刀筋の要は、斬る・殺す・屠る、生き延びる。それだけだ。斬り方など関係無い。

もう何も映さぬ楓の瞳はうすらと笑みを湛えたまま、雨を零す夜空を眺めていた。加羅は膝について、楓の臉を下ろしてやった。

「おや、お優しい」

汀だ。楓の臉に指先を触れさせたまま、加羅は動きを止めた。振り向かずとも分かる。汀は笑っているに違いない。

加羅の側に歩んできた汀は、影虎の消えた方角を手庇を作って眺

めている。

「追わなくてもよろしいんで？」

「手負いの猛獣とやりあいたくはないさ」

「おや。若君ともあるう方が弱気な事を」

「慎重だと言ってくれ」

汀はさもおかしげに肩を揺らして笑った。いつにも増して何を考えているのか分からない彼の横顔を見やりつつ、加羅は黒器を常態の数珠に変じさせた。

「まあ、何にせよ」

腕を懷手に引き直し、汀は糸のように細い目を笑みの形に曲げた。
「良い、ね。彼は。とても、さ」

薄い唇を濡らす雨粒を舐め取る様が、まるで爬虫類のそれである。
「良いね、あの目。それに、太刀筋に迷いが無いよ、ね」

汀の視線は楓の傷口に注がれている。だが彼の黒い目は、楓越しに楓を斬った紫呉を見ているようだった。

「……ふふ、それでこそだ。それこそが、殺戮のあるべき姿だ。……くく、く、……あつはははは！」

背を逸らし、雨空を仰ぎ汀は笑う。ひとしきり笑った後、汀は糸が切れたように、声からも顔からもふつりと笑みを消した。

「実に、愉しみだ」

ぽつりと呟き、そしてまた、笑い出す。

笑い続ける汀を差し置いて、加羅は楓の体を肩に担ぎ上げた。

「おや、どうされるんで？」

「瀬川の隣に埋葬する」

「……おや、おや」

汀は裂けそうな程に唇を横に引き、ぱつと芝居じみた仕草で腕を広げた。

「あなたは実にお優しい！ 実に慈悲深い！ そして、実に、傲慢だ！ あなたはまさしく英雄だ！」

「好きに言え」

短く吐き捨てる、雨音をかき消すほどの汀の哄笑が夜の森に響き渡った。

21 花椿

四

パタン、パタ、タ、タタタ、タタ、タン、という音は雨音かと思いきや、どうやら紫呉が右手に提げた牙月の刃先から滴る血が立っている音のようだった。

紫呉は屍の上に立っていた。屍は恨めしげな目でこちらを見ているから、きつと自分が斬つたのだらう。と、どこかぼんやりした頭でそう思う。

そして気付く。

これは夢だ。

だって、血のおいがしない。鼻が麻痺したのかとも思ったが、嗅覚がイかれたとしても鼻の奥をツンとつくあの感覚は残るから、その感覚が無いという事はつまりこれは夢なのだ。

屍のぐんにやりとした、それでいて固い感触が草履越しに足裏に伝わってくる。重くはないのか、と問おうとしてやめた。相手は屍だ。無意味である。

血振りして見渡せば、一つ二つと前後左右に屍が増えていった。瞬く間に屍は視界を埋め尽くした。

屍ばかりならば刃を収めても問題あるまい。そう思い紫呉は納刀しようとして、やめた。遠くに見知った姿が見えたからだ。

加羅だ。

何故ここにいるとそう思った瞬間、体が意思に反して強張った。固まった。

動け、と思ったのと、斬れ、と思ったのが同時だ。そして斬られたのもまた、同時だった。

左の胸元から右の脇腹にかけて、ずうらりと撫で斬られる。血が噴き出す。脚から力が抜け、膝から崩れた。膝について、体を折り曲げ、肘をついた。うつ伏せに倒れた。動けない。紫呉はただ牙月を握っている。

口から溢れた音を字で表すならば、ごえ、だとか、げあ、だとか多分そんなものになるだろう。兎にも角にもそんな音と共に口から血が溢れたのだが、さてこの血は体のどこを流れていたものだったかと、どうでも良いような事を考える。裂かれた腹から流れる血は、紛れもなく腹を流れていた血だと分かるのだが。

何とか首を動かして見上げれば、加羅の顔が見えた。しかし表情は見えなかった。紫呉はまだ牙月を握っている。

加羅の表情は分からぬが、じつと紫呉を見おろす紅緋の目ばかりが欄と光っていた。それを疎ましいと思う。

加羅が何か言った。が、聞き取れなかった。表情も分からない。パタン、パタ、タ、タタタ、タタ、タン、という音は雨音かと思いきや、どうやら加羅が右手に提げた向陽の刃先から滴る血が立っている音のようだった。

加羅が血振りをして、向陽を振りかぶる。首を落とされる、と思ったが、実際に首を落とされたのは紫呉ではなく翔太だった。

紫呉を庇って、翔太は二人の間に飛び込んできたのだった。

一撃目で、翔太は首を裂かれた。血が噴き出して、翔太の体が傾いだ。返す手の二撃目で、翔太は首を落とされた。

ぼさつ、ごろごろ、ろ、ろ。字で表すなら、多分、そんな音。紫呉はまだ牙月を握っている。

翔太の首筋からは血がざあざあ噴き出している。止まらない。首を、元あった場所にくっつけなければ。そうすればきっと、あの血は止まるはず。

早くしなければ。早くしないと、翔太が死んでしまう。それは嫌

だ、駄目だ。駄目だ。死んではいけない。

翔太の体が倒れる。首筋からは今なお血が勢いよく噴き出して辺りに降り注ぎ、ざあざあと音を立てている。

早く、早くしなければ、翔太が、翔兄しょうにい、翔兄が、翔兄の首を、早く。

動け、なあ、動いてくれ。

早くしなくては死んでしまう。

翔兄が、首を早く、翔兄の。

首を。

せめて名を呼ぼうとした。呼んで、彼の魂を呼び寄せようとした。なのに声は出ない。ただ、げえげえと血が出るだけで声が出ない。名を呼べない。翔兄と、そう、呼びたいのに。呼び寄せたいのに。彼の魂を。

加羅がじつとこちらを見ている。欄と光る紅緋の目でこちらを見ている。紫呉はまだ牙月を握っている。

握っている。

なのに、体は動かない。動かせない。紫呉はまだ牙月を握っている。握っている。ざあざあと翔太の血が降り注ぐ。加羅はこちらを見ている。

動け、

動けよ、何の為の牙だ！

動け、噛みつけ、喰らいつけ、喰い千切れ、突き立てる！

なあ、動けよ、早く、早く、早く！

じゃなけりや死ぬぞ、殺される、首を落とされて死ぬ、死ぬ、翔兄のように首を落とされて！

誰か助けてくれ、早く、助けてくれ、殺される、嫌だ、駄目だ、死ねない、死ねない、助けてくれ、助けてくれ、

ここで死んだら加羅を殺せない！

目を覚まして、真っ先に視界に飛び込んできたのは真白い布だった。どうやら自分はうつ伏せに布団に寝かされているらしい。

外は雨のようだ。風に煽られた雨粒がざあざあと音を立て、うるさいほどだった。軒先からでも雫が垂れているのだろう、パタンパタンと高い音も時折聞こえた。

障子越しに差し込む光は薄暗く、時刻を知らせるのに役立たない。だが灯は燈されていないから、まだ夜ではないのだとそれだけは何とか知れた。

紫呉は霞む視界をどうにかしようと、きつく何度か瞬かせた。おそらく何日かぶりの光に驚いているのか、目はそれでも上手く機能してくれない。目を擦ろうと手を上げて、紫呉は痛みにも呻いた。

腰が痛んだ。腹ではなく。

紫呉は痛みをやり過ぎ、ゆっくりと仰向けになった。左の胸元から右の脇腹にかけてそつと撫で下ろす。

その傷は、もう既に治っている。塞がっている。今痛む傷は、そこではなくて刺された腰だ。

（……刺された）

そうだ、刺された。吉村楓に。そして斬った。吉村楓を。

（……紗雪）

思い浮かべたのは、友の名と顔だった。

彼女に、と言えば良いのだろう。

「……ん」

思考を小さな声に遮られ、紫呉は寝転んだまま首を巡らせた。

障子の逆側の傍らに、影虎が座していた。胡座した膝に肘をつき、うとうとと居眠りをしている。

何だかものすごく久しぶりに見るような気がする顔にほっとすると同時に、申し訳なさが胸に湧いた。

心配を、かけてしまったのだろう。影虎の顔色は悪く、憔悴した

風情だ。

ふいに影虎の頭がぐんと揺れた。うお、と驚いた声を発し、影虎は眠たげに目元を擦る。

欠伸に浮かんだ涙を拭っていた影虎だが、紫呉と目が合い、桃色の目を大きく見開いた。ぱち、ぱち、と瞬かれる数を紫呉は何とはなしに数える。

さて、何と言おうか。おはようございますでも、おかえりなさいでも、何だかおかしいような気がする。

どうしたものかと悩んでいたら、ぐうと腹が鳴った。気恥ずかしさを誤魔化すように紫呉は腹を押さえ、視線を逸らした。

「……うどん」

「あ？」

「うどんが食べたいです」

蕎麦でも良いです。

そう付け加えると、しばしの後に影虎は呆れたようにふつと息を抜いて、紫呉の頭を軽く叩いた。

「……アホか」

影虎の呆れきった声が少し震えていたので、紫呉は何ともいえない気持ちになる。頭を叩く手はだんだんと乱暴なものになっていくが、やめろと言う気にはならなかった。

ひとしきり頭を叩き、影虎は最後にぐしゃりと紫呉の髪をかき混ぜ、逆の手の平で紫呉の目元を覆った。

「ただいま」

視界を遮られていたので、そう言った影虎の表情は見えなかったが、何となく想像はついた。約束の期日を守らなかった事は、もうどうでも良い事に思えた。

「……おかえりなさい」

目元を覆う影虎の手をのけようと、紫呉は影虎の手首を掴んだ。そこには数珠の感触が有り、清姫がちゃんと主のもとにある事に安堵を覚える。

影虎の手をどかす。彼の手首には確かに清姫があった。やはりこの黒曜の数珠は、影虎の手首を彩っているのが一番しっくりくる。

紫呉は己の左手首に視線を流した。そこには牙月がある。今は水晶の数珠の態をしており、大人しくしていた。

これで、たくさんの破天の者を斬った。吉村楓も。

だが、加羅を斬る事は叶わなかった。

脳裏に浮かぶ加羅の姿に、腹の底がふつふつと煮えあがる。

いったい何故、奴があ場にいたのだ。何故、何の為に。いったい何が目的だ。疑問は尽きない。

紫呉は体を起こそうと、腕と腹に力を込めた。痛み思わず声が漏れる。支えようと手を伸ばす影虎を視線で制し、どうにか一人で起き上がる。甘えたくなかった。

「会いましたか」

息を吐いて、尋ねる。誰に、とは言わなかったが、影虎は険しい顔で頷いた。

無言が落ちる。途端、雨音が膨れ上がったような気がした。

22 報告

雨音に交じり、足音が聞こえた。廊下を歩む軽い足音は、だんだんとこちらに近づいてきている。

すらりと襖が開かれた。

須桜は襖に手をかけたまま、大きな目を更に大きく見開き、その場で固まってしまった。

首を傾げどうしたと視線で問うが、須桜は無言のまま立ち尽くしている。

襖にかけられていた手がずるりと滑り落ちて、それに次いで須桜自身もその場にへたりとしゃがみこんだ。

「……良かったあ……」

涙まじりの笑み声に胸が痛んだ。須桜は四つん這いになって、ぺすぺすと妙な音を立てながらこちらにやってくる。影虎の隣に腰を落着け、そっと、紫呉の手に手を重ねた。須桜の手は熱を孕んでいた。

「……怪我を？」

「大した傷じゃ無いわ」

首を振る須桜を、影虎が何か言いたげにちらりと見やる。そんな影虎を、須桜もまた何か言いたげにちらりと見た。

紫呉は須桜の手の下から己の手を抜き、今度は自分が須桜の手に手を重ねた。熱い手をぐっと握ると、須桜は顔を上げて少し照れくさそうに（気まずそうに、かもしれない）笑った。

二人とも顔やら手やらに小さな傷が見て取れた。きっと見えぬ位置にも傷を負っているに違いない。

「……」

紫呉は二人を、二人まとめて抱きしめた。詫びる代わりに抱きしめて、礼を言う代わりに頬を摺り寄せる。

二人の首元に手のひらを寄せた。首はちゃんとつながっている。体温を感じる。脈動を感じる。生きている。二人も、自分も。

「……あの、ちょ、あの……紫呉？　こういうの慣れてないから焦るんだけど」

あたしはどっちかっというたと愛されるよりも愛したいマジで派っというか何ていうかなんだけどたまにはこれはこれでアリっというか何ていうか。でもこんなのされたら調子のるっというか自重できなくなるっというか何ていうか。

ぶつぶつ呟きながら須桜は顔を赤くしている。

「……えーと。報告、しますよー」

影虎の声は無理に低く抑えた所為でやや聞き取りにくかった。予想していなかった二人の反応に、少しばかり愉快な気持ちになる。二人が慌てているところをもっと見ていたくて、もう少しだけくつついていてやろうかとも思ったが、『報告』と言うからには真面目に聞かねばなるまい。紫呉は多少の名残惜しさを感じながらも、二人から体を離れた。

影虎は一つ咳払いをして、そっぽを向いたまま話し出す。

「まあ俺は瀬川拓也の事を調べに行ってたわけですが」

えーと、と言葉を切り、影虎は頬を指先で掻いた。ちよっと待て纏めるから、と言った声はまだ動揺を含んでいる。

「なのでまあつまり、瑠璃に戸籍がねえって事は玻璃だろって事であって、まあつまり、玻璃に行ってたわけですが」

「二回言いましたよ、『まあつまり』」

「うっせ、黙って聞いとけ」

影虎はもう一度咳払いをしてから、しかつめらしい顔で腕を組んだ。

「有ったよ、玻璃に戸籍。もう死んでたけど」

「どっという事ですか？」

紫呉は身を乗りだした。既に話を聞いているのか、須桜は黙ったまま難しい顔をしている。

「言つたまんまだ。瀬川拓也は玻璃の人間。それで、既に死んだ人間。ちなみに反逆の罪を問われてつて事で死んでる」

「反逆……」

「そ。偽焰ぎえん様に背いた罪つてな」

『偽焰様』とは、玻璃を治める日生家の現当主・第十四代目日生焰である八重やえを指した蔑称である。

瑠璃を収める如月が初代桔梗の名を襲名し代々血を繋いでいるのに対し、玻璃を収める日生もまた、初代焰の名を襲名し血を繋ぎ歴史を刻んでいる。

日生八重もまた、その歴史の中で『焰』の名を継いだ一人である。だが彼女が『偽焰』と呼ばれ蔑されるには、理由が有った。

それは、彼女が日生の血筋に連なる者とは異なつた容姿を持つからである。そのため彼女は、正等な後継者であるにも関わらず、弟にその地位を奪われ生きてきたのであつた。

弟である、第十三代目日生焰・与四郎いししろうが死亡するその時まで。

八重の弟である与四郎は、それは見事なまでに日生の血の者を体現した姿を持っていた。その為、長子が名を継ぐという慣例を廃し、与四郎は焰の名を継いだ。本来名を継ぐはずであつた、八重の存在を無かつたことにして。

与四郎の死亡後、玻璃はもめた。いったい誰が家督を継ぐのか？ 与四郎の息子はまだ幼く、家督を継ぐには頼りない。そこで名が拳がつたのが、八重だつた。

そして八重が家督を継ぎ、十四代目日生焰を名乗るようになって六年。その六年の間、囁かれ続けている噂がある。

『先代焰・与四郎様は、八重様に殺されたのではないか？』

『八重様は家督欲しさに、弟を殺したのではないか？』

そして彼女は蔑される。

偽焰様、と。

「で、だ。生前……かつこ仮、な。生前の瀬川拓也は護焰隊ごえんたいに所属していた。けど、何かまあ色々と思うところが有つたのか、背いて

処罰され死亡、って事になってる」

「実際は生きていて、……」

「ああ、今度こそ死んだ。殺された。誰にだか何でだかは分かんけどもさ」

護焰隊とは、偽焰様たる日生八重が自身の為に創設した部隊である。

本来ならば、焰の護衛には瑠璃の『二影』と並び称される『二吼』^{にう}が就くはずだ。だが二吼は八重の二吼たる事を拒否した。

二吼とは竜造・辰覇^{しんぱ}の兩名の事である。二影のように家血筋で主従の契りを交すわけではなく、彼らは玻璃の軍部の中から選ばれる。と言つても、焰が二吼を任命するのではない。二吼の名ともなっている竜造・辰覇の名を持つ黒器が、彼らを選ぶのだ。

黒器に選ばれた彼らは親から授かった名を棄て、竜造を、または辰覇を名乗る。そして焰を護る二対の龍となるのである。

先代焰・与四郎の二吼は、八重の守護を拒否し、今は与四郎の息子の側に在った。

二吼に守護を拒否された八重が創ったのが、件の護焰隊である。

「護焰隊隊長の名は斉藤汀。瀬川拓也はこいつの部下だ。……だった、のが良いかもな」

以上、と報告を締めくくった影虎は、疲れたのか長く息を吐いた。彼の溜息に重ねて、須桜もまた、ほうと息を吐く。それで、と口を開いた彼女の声は低く掠れていた。

「一度死んだ瀬川拓也は、吉村楓と恋をして、また死んだ。吉村楓も……」

「僕が殺した」

須桜の言葉尻に重ね、紫呉は言った。須桜は少しだけ責めるような目をして、紫呉を見た。

「……何で？」

「吉村楓が、僕を殺そうとしたから」

じつとこちらを見つめる須桜の瞳を、じつと見つめ返す。

「……その傷」

と、須桜は紫呉の腰を指差した。紫呉は腰を押さえ、自嘲に唇を少し曲げる。

「ええ、吉村楓に刺されました」

紫呉の腰の辺りに視線を流した須桜が、ふっと目を眇めて馬鹿にした声で言う。

「素人の女の子に刺されたの？　どれだけ油断してたのよ」

「ものすごく油断してましたね」

「馬鹿じゃない？　馬鹿よ、ほんとに。……無事で、良かった、けど……」

須桜は俯き、目元を擦る。もう一度、けど、と言葉を繋ぎ、須桜は俯いたまま言った。

「……紗雪には何て言うの」

雨が風に舞い、ザアと音を立てた。薄暗い室内は俄かに湿度を増したような気がする。

「……祭が始まる以前に、偶然紗雪に会いました。その時彼女は言っていました。吉村楓から手紙がきた、しばらくは瀬川拓也と旅行に行っている、という内容の手紙だった、と」

薬が切れたのか、腰の傷が痛み出した。痛みに浮かんだ冷や汗を拭い、紫呉は言葉を続ける。

「瀬川拓也も吉村楓も死んじやいない。ただ、旅行に行っているだけです。長い旅行なので、しばらくは瑠璃に帰ってこない」

溜まった唾を飲み下す。ぶり返した痛みに血の気が引いていく。

須桜は紫呉の肩を軽く押し、支えながら布団に寝かしつけた。

「……分かった」

紫呉の顔を覗きこむ須桜の顔は無表情で、何を思っているのかは知れなかった。

ふいに須桜は紫呉の胸元に額を寄せ、心臓のある辺りに耳を寄せた。触れる柔らかな髪がくすぐったかった。

しばらくそのままじっとしていた須桜だが、ぱっと身を離し袂を

探る。片手で紫呉の口を半ば無理やり開けさせ、取りだした丸薬を口中に放り込んだ。

「……っ苦い、ん、ですが!」

「そりゃそうよ、兄貴が作ったんだもん。ちなみに水で流そうとするとともに苦くなるのでオススメしません」

でも即効性は半端ないわよー、と須桜が言う通り、先程まで体中を満たしていた痛みがすっと退いていく。痛み止めか。

「……分かったわ。吉村楓の生家が最近になって店仕舞いしたのは、きつと娘夫婦の旅行について行ったからね。今頃きつと、樹海の外で、子供が生まれたら何て名前にしようとか、そういう話をしてるのね」

そうだな、と影虎も頷く。

須桜は紫呉を裏返し、腰の傷に軽く手を当てた。

「……こんなに油断するなんて、あの馬鹿の所為?」

くすくす、と小さな笑い声が背中に降ってくる。須桜の笑い声は止まない。

「ほんと、何なのあの馬鹿。何でいるの。何がしたいの」

笑いながら須桜は紫呉の背を撫でる。

「……意味わかんない」

弱々しく呟いたその声も、笑みを含んでいた。

「………須桜も、会ったんですね」

「まあね。一生会いたくなかったけど」

「僕もです」

「………そう、ね」

「意味の分からん事、もう一個有るぜ」

影虎が思案声で言った。

「お前ら二人が意識無い間にさ、現場に行ってきたんだ。そしたら、吉村楓の遺骸が無かった。肆班と話つけて破天の奴らの遺骸も見えてきたけど、回収された遺骸の中にはやっぱ無かった」

「それは……」

「さあな。何でもかかは俺にやあ分からんよ」

と、影虎は肩をすくめてお手上げの態度を示す。

「……本当に、意味の分からないことばかりですね」

思わず漏らした嘆息は、静かな部屋に妙に大きく響いた。

23 述懐

しばし無言が落ちた。三人とも口を噤み、それぞれ思案にふけていた。

ふと須桜が立ち上がり、襖へと向かう。先程部屋に入ってきた折、開け放したままになっていたのを思い出したのだろう。

襖に手をかけた須桜が、ぴたりと動きを止めた。そして膝をつき、深く頭を垂れる。

近づいてくる気配を察し、紫呉は体を起こした。正座して訪問を待つ。

「起きたか」

由月だ。彼は礼装に身を包んでいた。何故、と口にしようとしたが、それよりも先に由月が口を開いた。

「破天に狙われ頭に血でもものぼったか？ 浅慮だな。……愚かしい」

閉じた扇を口元に沿え、吐き捨てるように言う。膝を崩して座つ

たままの影虎は、苛立ちを隠そうともせず由月を睨んだ。

「おや、何か言いたそうだな。役立たずの癖に偉そうに」

「んだと？」

「祭にまでには帰る、と言ったのは誰だ？ お前だろう」

と、由月は扇子の先で影虎を指した。

「そのくせお前は祭までには帰ってこなかった。そして主に傷を負わせた。お前が側にいれば紫呉もこんな目に遭わなかったかもしれないのにな。役立たず以外に何と言えば良い？」

ぐ、と影虎は言葉を詰まらせる。

「須桜」

「……は」

「その様は何だ？ 己の身すら護れぬならお前も同じく役立たずだ」
「兄様、お言葉ですが」

「黙れ」

鋭い叱責に、紫呉は二の句が継げなくなる。

「お前がとやかく言うな。全てお前が招いた事だ。一番弁えるべきはお前だ、紫呉」

由月は座し、手にした扇子を膝に打ちつけた。パンと高い音が鳴る。

「この愚か者め」

声に含む怒りはそのまま、由月は静かに言った。

ふと紫呉は思い出す。以前、由月に言われた。――お前はいつか女に刺されて死ぬ気がするよ。

期せずその言葉が真になりかけたのかと思えば、何だかおかしいような気がした。が、この場面で笑えるはずもない。

由月は呆れたように長く長く息を吐くと、扇子で紫呉の側頭部を軽く叩いた。

叩かれた側頭部が妙に痛むと思えば、それもそのはずで、そこは棍で打たれた箇所だった。手を伸ばせば包帯の感触がした。ついでに言えば伸ばした手にも小さな傷が多々有って、我ながらひどいものだと思った。

「……この愚か者め」

今度は扇ではなく指先で紫呉のこめかみに触れ、由月はもう一度繰り返した。声は変わらずに怒りを含んでいる。細められた目も顰められた眉も、立腹の態そのままだ。

そして由月は全ての感情を押しやった顔と声で言った。

「支度をなさい」

「支度？」

「ああ。日生の方々が此度の騒動の慰問に来られるらしい」

お前たちも用意をしろ、と影虎と須桜に告げ、由月は部屋を後にした。タン、と高く音を立てて襖が閉められる。

「……慰問」

慰問といえど、瑠璃の里（もとい支曉殿）まで訪ねてくるわけで

はない。玉骨と呼ばれる里境の塀の付近には、日生との会合のために設えた閑寂な庵がある。何かの折にはそちらまで双方が出向く事となっている。

閉じられた襖を眺めていた紫呉だが、何だか急に疲れに襲われてどさりと仰向けに布団に沈んだ。傷に響いてしばし呻く破目となり、何をしているのだと言いたげな二人が呆れ顔で見おろしてくる。

紫呉は片腕を目の上に乗せて、視界を遮った。そうすれば何も見えなくなるだろうと思ったのに、閉じた瞼の裏には光の残像が赤く残っており、その色は誰かの瞳を思い出させ苛立ちが募るのだった。自然と己の胸元を探るが、そこには目当ての物はない。舌を打つ。すると、側頭部を軽く何かではたかれた。腕をずらして見やると、見慣れた煙草の箱だった。

「一本だけな、病み上がり」

「……怪我の後でも病み上がりと言っのでしょっか」

「知るか」

箱を漁り、一本取り出し箱を脇に置いた。不精に任せて寝煙草と決め込む。

くゆる紫煙を目で追う。紫呉は煙草の味よりも、こうしてぼんやりと煙を見ているのが好きだった。それから、この香りに包まれるのが。

そろそろ灰が落ちそうだ。紫呉は一度うつ伏せて肘をつき、なるべく傷に響かぬようにして体を起こした。

須桜が用意してくれた灰皿に灰を落とし、しばしの逡巡の後、結局火を消すことにする。

「用意をしておいてくれますか」

日生との会合となれば、五つ紋に身を包まなければならない。それに楔もせねばならない。

煙草の箱を手に、ゆっくりと立ち上がる。ぐらついた紫呉を須桜が支えた。

「平気？」

「……ええ」

情けない。立ち上がるだけでこの様だ。

「ほんとに大丈夫？ お腹空いてない？ あ、あとで葛湯か何か楔場の前まで持っていこうか？ あとそれから白湯とか……」

「ええ、お願いします」

須桜の肩を軽く押して平気だと示し、紫呉は一人で立った。楔場へと向かう。背中に心配げな視線を感じたが、気付いていないフリで歩みを進めた。

楔場の戸を閉めるなり、紫呉は背を壁に預けずるとしやがみ込んだ。

どうにも体が重かった。手足から何からとにかく重くてだるくて、身の内には中途な熱を抱え込んでいた。

傷の痛みは薬が効いているのか、無理な動きをしない限りさほど気にはならない。だが心臓が血液を送り出すのに合わせて、どくどくと脈を打っているのが妙に鮮明に感じられた。

呆と瑠璃天井を見上げる。雨は先程よりも幾分か小雨になったように、叩きつけるような音は聞こえてこない。だがその分風の強さが増したようだ。風に舞った雨粒が瑠璃天井に微細な影を落とし、複雑な紋様を描いていた。

その様を眺めながら、紫呉は考える。吉村楓は、最期に何を想っていたのだろう。

夜闇の中に見た彼女は、最期の瞬間も笑っていた。笑って、夜空を見上げていた。その目にあの曇天が見えていたのかは知れぬが、暗い眼には雨空が映り込んでいた。

彼女は笑っていた。腹を裂かれたのに。皮膚も、肉も、血管も、骨も、臓物も、彼女の命を構成する全てを斬り裂かれたというのに。そうだ。この手で、彼女を斬ったのだ。彼女の柔らかな腹を斬り裂いたのだ。紗雪の、友人である少女を殺したのだ。

(……だから何だ)

友人だから、何だというのだ。関係ない。楓は己に刃を向けた。

だから殺した。だから排除した。そうしなければ、己が死ぬと思っただから。

楓以外にも斬った。何人斬ったか知れぬ。もとよりあの場に何人いたのかすら分らない。ただとにかく、排除せねばと、生き抜くと、そう、考えて、そう考えて斬った。

楓は言っていたか。

『三吉さんと、舞さん、すごく幸せそうだったよ。二人目が生まれただ、って、……すごく……』

二人目、という事は彼らは人の親だったのか。その三吉さんと舞さんを、紫呉はどうやって斬ったのか覚えていない。というよりも、三吉さんと舞さんがどれか知らない。ただ、刃を向けられたと、そう記憶している。あの場にいた全員に、敵意を、殺意を向けられたと。

だから、だから斬った。あいつらが僕を斬ろうとするから。だから。だから殺した。そうしなければ自分が死ぬから。だから。

そもそもあいつらが刃向かうのが悪い。如月に楯突くのが悪い。そんな馬鹿げた事を考えなければ、死なずにすんだものを。

楓だって、死なずにすんだものを。

吉村楓は、最期に何を考えたのだろう。何を想って、笑っていたのだろう。憎かったろうに。恋人を殺した（と思い込んでいる）僕に斬られて、命を奪われて、憎かっただろうに、何故、笑って逝ったのだろうか。

なあ、憎かっただろう。楓も、三吉さんとやらも舞さんとやらも。僕を恨んで、憎んで、そして死んだんだろう？

なあそうだろう？　だって僕は憎い。憎かった。昔（という程昔ではないが。まだ過去にはできないが）加羅に斬られて僕はあいつを憎んだよ。痛くて苦しくて悲しくて、怖くて恐くて、叫びたかったよ。今も憎い。出来るのなら殺してやりたいさ。

きつと、翔兄もそうだっただろう。首を斬られて（僕を護った所為だ）恨んだだろう。お前が、僕がいなけりや死なずにすんだ、っ

て、ねえ翔兄、そう思ったでしょう？

でも最期に、翔兄が本当は何を考えたのか、何を想ったのか僕は知らない。だって僕の前に倒れた翔兄の体には首が無かったから。最期に翔兄がどんな顔をしていたかなんて知らない。だって、首は、どこかに転がっていったから。首から溢れる血を止める事も首を拾いに行く事も名を呼ぶことさえも出来ずに、僕の意識もどこかに飛んでいってしまったから（そして次に目を覚ました時には翔太は白い布に包まれた小さな箱に収まっていた）。

翔兄には恋人がいたのに。部下にも慕われていたのに。なのに死んだ。僕を護ったから。僕があの場合にいなければ、僕がもつと強ければ、死なずにすんだものを。

そもそも、僕が刀を手にしなければ良かったんだ。そうすれば何も、誰も、死なずにすんだかもしれない。今も、笑って生きていたかもしれない。吉村楓も三吉さんも舞さんも、翔兄も。

そうだ、あの日、あの時、あの場所で、加羅が僕を刺したから。あいつが、僕に憎まれるような事をするから。そんな事をしなければ、僕は力なんて求めなかったのに。

全部加羅の所為だ。全部、全部全部全部。全て加羅の所為なんだ。全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部全部。

「……………ははっ」

違う。

分かってる。

選んだのは自分だ。

力を求めた。強くなりたかった。憎かった。加羅が憎くて、僕を殺そうとした加羅が憎くて、護られているだけの自分が嫌で（あの時だって僕を護って影虎は片足を失った）だから強くなりたいと願ったんだ。

『願っているだけじゃあ何も手に入らないよ？』

『私の駒になりなさい。お前の牙に餌を与えてやろう』

そう言って鳥獣隊へと誘った由月の手を取ったのは自分だ。この

道を選んだのは自分だ。

全部、自分が選んだ結果だ。

紫呉はせりあがる吐き気を、唾と共に飲み下した。だが押さえきれず、這い蹲って胃液を吐いた。

酸の味が口中に広がる。不味い。胃が引き絞られるように痛む。

「……目を、背けるな」

背負え。

生き抜け。

抗って、しがみついて、生き抜いて、そして死ね。

この命は数多の命の上に在るのだから。

「……目を背けるな……」

血に快楽を覚える、自分自身からも。

紫呉は汚れた口元を拭い、体を起こした。煙草を箱から取り出し、火をつける。震える指先が情けなかった。

ジジ、と音を立てて燃える煙草の先に視線を落とす。深く息を吸えば吸うほど、炎はその赤の色を濃く染めた。

慣れた煙草の香りに安堵を覚えた。まるで翔太が側にいるような気がしてくる（そんな事あるわけも無いと分かっている）。

煙を吐き出し、泉に足をつけた。波紋の広がる水面には、どこことなく薄汚れた風体の己の姿が映っている。唾でも吐きかけてやりたい気分だった。

今も、鮮明に残っている。覚えている。楓の腹を裂いたあの感触。あの高揚（紗雪の笑顔が脳裏によぎった）。

加羅は、どうだったろうか。紫呉の腹を刺した時、斬った時、翔太の首を落とした時、彼は何を思っただろう。何を感じただろう。

なあどうなんだ。罪悪の一つでも感じたか？ それともお前も快楽に吞まれたか？

ああ、そうだと良いな。そしてお前も苛まれていると良い。そうでなければ卑怯ってもんだろう。

紫呉は喉を引き攣らせるようにして笑った。

（卑怯なのは僕か）

紗雪に、真実を知らせぬと決めたのだから。

だとて、どう伝えれば良いのだ。真実そのままを告げれば良いのか？ 楓が破天に組し、紫呉を殺そうとして、そして紫呉に斬られて死んだと、そう伝えれば良いのか？ まだ源悠一の一件の傷も癒えていないだろうに。

いや、そう考えるのはおこがましいか。あの一件に巻き込み、騙し、利用し、そして傷つけたのは自分達なのだから。

しかし、傷つくと分かっている真実を告げるのはやはり抵抗があった。

ならば、嘘を貫き通す。この嘘を真実にする。その方が良いように思えた。

気がつけば煙草が随分と短くなっていた。紫呉は火を消し、吸殻に砂を被せた。ついでに先程吐いた胃液にも砂を被せておいた。

全身を泉に浸す。傷に沁みて痛んだが、熱を孕んだ体に水の冷たさは心地良かった。

もしも楓が紗雪の友人ではなく、ただの破天の者だったらこの罪悪感は多少なりとも薄らいでいただろうか？

それとも、楓が紫呉に対するまでに何人かを殺め手を汚していたとすれば、安っぽい正義感にでも酔えただろうか？

紫呉は水面に顔を出し、大きく息を吸った。息を吐き出すと同時に、感傷も全て体の外へと吐き出す。考えても詮無い事だ。

結局のところ何であれ、己はどこまでも人殺しだ。

24 再会

その後、用意してくれた白湯で喉の渴きを癒せば、腹の虫がぐうと鳴いた。葛湯で飢えを満たせば、今度は眠気が押し寄せてきた。どうにも己の身体は欲に素直にできているらしい。

何だかおかしいような気がして自嘲に唇を歪めれば、向かいに座った須桜が小首を傾げた。それに軽く首を振って何でもないと言外に示し、紫呉は幌のついた俵の外の風景に視線を流した。

紫呉たちは今、玉骨庵へと向かっている最中だった。皆一様に黒色の礼装に身を包んでいる。

中でも自分をはじめ如月の人間は、月紋の染め抜かれた羽織袴に黒留袖姿だった。仕立ての良い絹織は肌触りがよく、まるでぴたりと吸い付くように体に沿う。怪我を負った肌に触れても、さして気にならない程だった（痛み止めのおかげもあるのだろう）。

路傍の紫陽花が霧雨を受けて、生き生きと葉を広げていた。その上をかたつむりがのたりのたりと這っている。

遠くに見える山の頂は雲に隠れて見えない。雲から山が生えているようにも見えたし、山が雲を乗せているようにも見えた。見慣れた光景のはずだが不思議なものだと、今更にそんな事をふと思う。

のどかな風景に反し、庵に近づくにつれ紫呉の心模様は漣だつていった。どうにも平静ではいられない。

表情に感情が出にくい質なのは知っているが、その自分分はどうやら目に感情が出るらしい（と、先日崇が言っていた）。

なので、感情を悟られぬよう紫呉は目を閉じた。腕を組み、背をもたせ掛けて俵の揺れに身を任せる。

そうするうちに眠ってしまっていたらしい。がくん、と大きく俵が揺れた拍子に紫呉は目を覚ました。と同時に自分が眠っていた事を知る。

俤を降りる他の皆に従い、紫呉も俤を降りた。眩しさに目を細める。

いつの間にやら雨はやみ、雲も随分と薄らいでいた。中天にさしかかった太陽の輪郭はぼやけ、まるで羅の衣を纏っているかのようだった。

門をくぐった向こう側、竹やぶに囲まれるようにして玉骨庵はひっそりと建っている。庵の庭園には季節の花が咲き、澪月の今は紫陽花や花菖蒲などが目を楽しませてくれた。

庵の入り口、石灯籠の側に三人の男の姿を見つけ、紫呉はすうと目を細めた。指先がチリチリと焼け付くように痛む。

一人は、三十半ば程の見るからに屈強そうな男だ。短く刈った明るい茶色の髪に、垂れた若草色の瞳。人の好さを感じさせる朗らかな顔立ちをしているが、左頬から鼻筋を通り、右頬へと走る刀傷のおかげで強面に見えた。彼の名を、春日井竜造かすがいという（厳密に言えば竜造は『名』ではなく『号』ではあるが）。

二人目は、二十代後半と思しき男だ。彼は青味の強い銀の髪と空色の瞳を持っていた。伏し目がちの目や引き結ばれた唇は表情に乏しく、冷酷な印象を受けた。彼の名を、壬生辰霸みぶといった。

そして三人目。彼は普段は適当な位置で適当な結び紐で適当に纏めている蜜色の髪を、今日は高い位置で豪華な結び紐できれいに一つに纏めていた。が、疎ましく伸びた前髪は相も変わらず、今日も左目を覆い隠している。

彼は白絹の五つ紋を身に纏っていた。袖には同色の絹糸で流焰文の縫い取りが施されており、光の加減によってはいかにも真の炎のように写實的に浮かび上がる。

彼の紅緋の瞳が、こちらをひたと見据えた。その視線は僅かばかりとも笑みを含んでいない。

紫呉はその視線を受け止め、己もまた彼をひたと見据えた。拳を固め、乾いた口をゆっくりと開く。

「……ようこそいらせられませ、日生の若君」

紫呉の言葉を受け、日生加羅は笑った。

曇天と晴天がすれ違い、雲間から光が零れ落ちる。陽光を双肩に負い笑う加羅の姿は、いつそ暴力的といって良い程に美しかった。

ザアと風が二人の間を駆け抜ける。

雲は晴れ、かんと澄んだ青空に虹が笑い出す。

だがしかし、この身の内に降りしきる憎悪と怨嗟は、今もなお。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3497v/>

哭雨 —綴命記第3章—

2011年10月8日03時29分発行